明治三十年七月二十一日發行

女鑑



第百三拾七號

東京國光社

女鑑第百三拾七號

目録

佐倉宗五郎の妻



親の慈悲

可愛き子には旅をさせよとは、何時の世の眞實の親の教へ遺しけむ言葉ならむ。實に一向に蝶よ花よとのみ愛ではやし、玉よ寶よとのみ撫であつかひたらんばかりにては、やがて、子を思ふ愛情に溺れはてたるにて、誠に子を愛すべき親の道にあらず、さては、悪しく云ひたらむをも、善しとのみ聞き、醜く振舞ひたらむをも、美はしとのみうち見て、一向に子の云ふまゝに、行ふまゝにまかせて、唯我が子嬉れしかれとのみ、もて侍きてあらむは、やがて、子ゆゑの闇に迷へるにて誠に子をいとほしむ親の慈悲にあらず。斯くては、誠に子を愛する道にも、誠に子を慈む道にもあらねば、やがて。誠に子を養ひ育てむ親の道にはあらずかし。子を養ひ育つるには、やさしき笑顔の中に、正しく犯すべからざる威嚴を具へ、

やさしくかひなづる手先に、正しく進むべき道の指導をも兼ぬるやうにせざるべからず、やがて、飽くまでやさしき慈愛心の下に、始終正しき教訓を盡くさんやうにしてこそ、誠に子を愛び育てゆく道なるべけれ。

世の親の子を養育する目的は、我が子をして、世の中の健全なる人と成らしめんとするのみ。健全なる人とは、即ち、完全なる智識道徳身体を具へたる人を云ふまて、斯の如き人こそ、世の中によく立ち、よく行き、よく云ひ、よく行ひ、よく守り、よく進むべき人なれば、健全なる人とは云ふなり。而して、慈悲に教訓に威に愛に、その一つを欠きては、此の健全の人を養ひ上ぐる事は能はざるべし。掌上の玉、膝下の花蝶とはかり、一重に愛ではやすのみにては、いかで、此の完全なる人を作るを得む。彼の雨露のやさしき恵みに生ひ立つと雖、風雪の苦しみを知るが故に、松柏はいよ／＼堅くめでたき木と成るに非ずや。人の上も、また同じ道理にこそ。

されど、世の母親たる人を見るに、此の道を知れりとおぼゆるは、極めて稀れな

り。さはかりの道理、知らざるにはあらさらめど、その心の弱きが故に、兎角に我が子の可愛さにのみ引かれて、知らず〳〵、愛に過ぎ、慈悲に過ぎ、子ゆゑの闇に迷ひはてて、かなしくいとほしき我が子をして、なか〳〵に、人にして誠の人ならぬあさましくくちをしき者と爲しはつる世の母親こそ多きなれ。

男子の事は、此處に用なければ云はず。されば、唯女子を有てる世の母親たる人に願ふべきは、やがて、女子をして、よく其の健然なる女子たらしめむ養育の道を心懸けられん事なり。健然なる女子とは、即、完全なる女子たる道徳智識身體を具へたる女子にて、よく子たり妻たり母たる道を知れるを云ふ。

子として妻として、母として、やさしき女子たるべき立居、振舞、心ざし、などの教訓は、もとよりの事にて、殊に心がけて教ゆべきは、女子は必ず父母を離れてよそに嫁ぎ、其の一家を治め、其の家庭をあづかるべき大任を有てる者なれば是非に其の程の心がけは、よのつねばかりは、豫め教へざるべからず。さるに、世の母は、我が子の可愛さまゝに、其の云ふまゝ欲するまゝにまかせるものから

我儘氣隨の女子と成りはてゝ、よろの家に嫁ぐや、むづかしき姑小姑の間に立ちて、賢き嫁たるを得ず。美しく育て樂しく遊び、うまく食ひて安くいねよとのみもてかしづきて、女子の一般の營みをだに敎へざれば、よく、家族の衣食を整ふ事をなせず、よく一家を守る事をなせず。ましてや、よく子供を養ひ育つる道は出來べくもあらず、遂に賢き家婦となり賢き母親たるを得ず。さては、女子にして誠の女子ならず成りゆくは、皆、子に甘くして、姑息の愛にのみ溺れ、女子が一生を愛せざるものなり。女子が一生の幸福を與ふべき道を知らざるものなり。されば、女子を有てる世の母よ、我が女子の幸福を欲せば、我が女子の一生の幸福を欲せよ。我が女子の可愛くば、健全なる女子となさむ事を心懸くべし。



日本女子大學設立に就て

文明童子

山師の大山を企て、詐僞師の大詐僞を働くの類、必ず始より詐僞の如く見ゑ、山の如く聞ゆるものに非す。其の言ふ所は、如何にも眞實らしく聞ゑ、其の爲す所は如何にも正確らしく見ゆるを以て、人或は之に欺かれ、其言を信じ、其の擧に應じて、之を助け、知らず識らずの間に、其の罠に罹り、其の阱に陷り、遂に彼の山師詐僞師の、目的を達せしむるに至る、實に注意を要す可きは、世間の事なり。若山師の言にして、始より山の如く聞ゑ、詐僞師の言にして、始より詐僞の如く聞ゆれば、誰か其罠に罹り、誰か其阱に陷るものあらん。必ず、其の詐僞、其の山なることを看破して之を排斥し、彼等をして、其の手段策略を施すの地無らしむべき事、亦言を待ざるべし。

童子、頃日、大阪に、日本女子大學校設立の事有りとて、新聞に、雑誌に、其の可否を喋々するを聞き。其の趣旨書、及び主唱者の演説、又其の著はす所の、女子敎育と題

せる書等を見て、頗る時事に感することを有り。以て一言を呈して、我が國家を愛念する諸氏の參考に供せんとす。

抑〻本邦の今日に於いて、女子敎育の必要なるは、主唱者が、趣旨書に著書に、演說に、數萬言を以て、開陳したるを待す。我が四千五百萬の、兄弟姉妹が腦中には、甲乙に論無く、皆此の考を持たざるは無き筈のことなり。故に、斯る說を、今の世に持出さば、何の造作も無く、之に響應するもの〻多きは、是亦奇むに足らざる所なり。已に、童子の如きも、一度之を見たる時は、女子の敎育の爲に、完全なる學校を設立すると云ふ點に就いては、全く同情の感を發したるなり。然れども、此の書類を熟讀翫味するに、主唱者が、千言萬語を用ゐて、内外を引き、古今に證し、種々に說を設けて、他を貶し、自を褒し、巧みに同感を惹くの具に供したるは至れり盡せりとも云ふ可きなれども、其の學校敎育の精神と指すは、抑〻如何なる精神の事を云ふか、實に曖昧模糊の間に隱して、容易に之を認め得ざらしめんことを力めたるものの如し。童子は、主唱者が、敎育の精神とさすものの、那邊に在るかの、認め難きより、彌〻之を此の書中に覔むるに、頗る奇むべきものの有るを發見せり。其は、先、其の趣旨書に、

女子には女子の盡すべき自然の天職なるものあり。その主要なるものは、即ち賢母良妻たるにあり。(中略)試に日本將來の、賢母良妻たる者の、資格とすべきものを擧けなは。高尚の女德、銳敏の智力、强健の身體、及び相應の藝能を、備ふべき是なり。(中略)夫、女子も亦、國家の臣民なり、宜しく國民たるの觀念を與へ。明晰なる國家的意識を懷かしめ、英米佛獨の女子に非ずして、日本婦人としての、特性を備へしめ。且、國民たるの資格を授け。例せば、一旦緩急ありて、義勇公に報し、遠く外征するの場合に際し、良人をして、內顧の憂なからしめ、良人に代りて、よく家政を齋へ得るの、伎倆を與へざる可からず。

と云ひたり。至極尤の事にて、此に異論は無かるべき如くなれども、斯の如く云ひては、主唱者の敎育を受ざる內の、我が國の女子は、國家の臣民たることを、知らざる者の如く聞え、又日本婦人は、全く英米佛獨の女子と化し了せんとするもの丶如く聞ねて、誣妄を極めし過言と云ふべきにあらずや。固より童子等が眼より見るも、我が國從來の女子敎育の、不完全なるは、今更云ふまでもなけれど、さり迚我が國の女子が、國家の臣民に非ずと心得、婦人が英米佛獨の女子に、化し去らんとするとは、毫も認むべき事、有ること無し。己に主唱者が、未だ女子大學の、設立を見ざる以前に

係る日清戰役の時のごとき。日本婦人は矢張日本婦人にして、現に良人の留守を守りて、家政をも齊へ、良人をして、内顧の憂なからしめしに非ずや。又日本女子にして、彼の役に軍資を投し、身自ら看護婦に從事し、歐米女子に劣らぬ、赤誠を國家に盡したるもの、往々少からざりしにあらずや。然るに、主唱者が、此等の事實を眼前に見て居りながら、前の如き、妄言を爲したるものは、是れ全く爲にする所有るものにして、我が國在來の風習に一打擊を試み、人をして驚かしめ、以て自己の敎育說に、同情を表するものを喚起せんとの術策にいでたるや、蓋し疑ひ無きものならん。

然れども、童子は、强て之を尤むるものに非ず。又主唱者の云へる所は、今引ける文中にては、此の過言を除く外は、其の理無きに非ざるを以て、童子に於いても斯の如くあらんことを、欲するものなり。然るに主唱者は、其の著はす所の、女子敎育の第三章、德育の第三節、女德養成の方法の五、宗敎の條下に於いて、此の言を爲したり。曰く、

現今の本邦敎育界を觀察するに、宗敎の衝突を恐れたる結果として、宗敎々育を怠慢に附するのみならす　隱然之を嚴禁するの有樣あるは、亦痛嘆すべきことならずや。宗敎熱心家が、敎育をもて宗敎の方便とするは、極端の誤謬なるか如く、凡て

宗敎は之を學校より放逐すべきものとするも、是亦一方の極端なる謬誤なるのみ。夫れ一定の宗敎、若くは宗派の敎理敎條を學校に入るゝは、素より不可なりと雖も人間一般に通有する、宗敎心を培養し、高尚にし、滿足せしめ、以てその餘澤を德育に被らしむるに於て、何の弊害あらんや。吾人は、啻に學校內に於て、奉敎の自由を實在せしむるのみならず、吾人の所謂宗敎々育の實施せられんことを欲するものなり。

と云ひ、猶此の語を次ぎて、

女學校の宗敎々育上より生ずる家庭に於ける衝突の恐るべきを論ずるものありと雖も、吾人の所謂宗敎々育を、正當に實施せん乎、此等の弊害は跡を絕つに至るべし若し、何等弊害ありとするも、そは唯智識敎育が家庭に一種の衝突を生ずると同一にして、また恐るゝに足らざるべし、這般の衝突は、只一時のものにして、舊新の兩思想が平均するに至らば、直に湮滅すべきなり。

と云ひたるが、是れ主唱者が、曖昧模糊の間に、陰蔽し去らんと力めたりし　滿腔の本心遂に包藏し得ずして、端なく爰に暴露したるものなり。所謂狐狸が尾を顯はしたるものなり。其の故如何とならば、此の前後に、或は宣敎師派學校なるもの有りて、

教育を利用して、傳道せんとするは不可なりとか、一定の宗教、若くは宗派の教理教條を、學校に入るゝは、素より不可なりとか、巧みに云ひ廻して、人の目を眩惑し。吾所謂宗教々育なるものは、其の類のものに非ずと、暗に人を安心せしめ置て、其の氣の付かざるやうに、僅かに簡單なる文字を以て、其の人心を喚起する爲め修飾に供したる文は、一切之を打消したり。其の巧みなる實に驚くべし、其は此の今引ける文中に。吾人は、啻に學校内に於いて、奉教の自由を實在せしむるのみならす、吾人の所謂宗教々育の、實施せられんことを欲するものなりと有るにて知るべし。斯の如くにして、主唱者の設立する女子大學は、奉教の自由を實在せしめんとする學校なり。又、所謂と云ふ曖昧なる語をこそ被らせたれ、實は宗教々育を實施せんとする學校なり。果して然らた、主唱者は、自ら教育を以て、宗教の方便とするは、極端の誤謬なりと云ひたれども、此は人の疑團を避くる方便の一言に過ずして、其の實此の學校は、教育を以て宗教の方便とする爲め、設くる所たること、更に疑ひ無し。而して、其の自己の宗教を、何教と云はずして、輕く學校内に、奉教の自由を實在せしめんと云へるは、實に狡猾を極めたる云ひ方なりと云ふべし。

主唱者既に奉教自由を許されたる學校を設立し得たりとせん歟。所謂と云へる曖昧な

る語をこそ冠らせたれ、宗敎々育をゆるされたる學校を設立し得たりとせん歟。其の始めに在りては、必す事を愼みて、趣旨書に、演說に、著書に、世に公にせる言を憚り、外面を裝ひて、眞面目らしく人に見せんことを勉むべきは、云ふまでも無けれど、若し此の學校にして敎育を以て宗敎傳道に利用せんとする爲め設くる所の女子大學ならしめんか早晩其の正体を現はすべき事、是亦云ふを待ざるならん。然れども、今日に在ては、主宰者の爲には、世人を籠絡して、奉敎自由と、宗敎々育を許されたる、女子大學を設立するの時にして、後日に至りて、此の宗敎を女子學生に注入するとは、固より云ひ出すべき時に非ざるを以て之を云はざるより、彼は何宗敎の爲に、斯る陰險手段を行ふものなるか、之を知るに由無き如くなれども、彼古語に、其の爲る處を視、其從る所を觀、其の樂む所を察れば、人焉んぞ廋さんやと云へる如くにして、彼が生來の實歷に徵すれば自らに判然するもの有らん、仍て今其の經歷の一二を擧げんに、彼は元大阪の梅花女學校、新潟の高等女學校等に在て、耶蘇敎の普及に、孜々汲々たりしものなること、明白なり。又彼が米國に渡りて、女子敎育に係る研究の爲め、幇助を受けたるものは、多く彼國の牧師なりしこと、是れ亦瞭然たり。其の彼が爲にする所のもの。及ひ彼が敎育の精神と指すもの

推て知るへきのみ。　（未完）

女子教育一斑（四十五）

三輪田眞佐子

（其七）女子高等教育

おのれは、これまで述べつる所を以て、女子尋常教育の綱領となすなり。そも〳〵、女子教育上最も肝要なるは、尋常教育ならん。そは内に於いては良妻賢母となり、外に於いては完全なる國民となる品格を專ら養ふを目的とすれはこそ、蓋かゝる目的は小學教育の及ふ所にあらず、さりとて、高等教育は、これを受くる女子少數なるのみならず、かゝる品格を養ふ以外の目的を兼ぬれぞ、比較的切要なりとて言ふべからず。

故に、おのれは、以上にものしける尋常教育を以て必要と思ふなり。

さりながら、女子尋常教育のみをものして、女子高等教育を言はざるときは、兩者の區別、及び關係明かならさるを以て、いみじき誤謬の生せんも知るべからず。由りて、茲に、女子高等教育の一篇を附記するになん。

實は、女子尋常教育は、女子として、是非とも欠ぐべからさる品格を養ふを以て重大

になすべきは勿論なれども、女子高等教育もなくてやは止むべき。その理由を左に述べん。

第一　人類の天性を全うせんためとつ國の學者に進化論を唱ふるものあり。それは、宇內萬有は、なべて進化して止まざるものとなすなり。さればにや、人類だに猿猴の進化せしものと言ふなり。おのれは今かゝる學說に基きて述ぶるにはあらず、唯、人と生れしからは、進歩せでやはあるべき、大學に曰く、苟日新日々新又日新とあり。又、古人は、後世恐るべしとて、國民の進歩を認めけり。思ふに、草木の蓁々と上方に向ひて發芽するやう、人類は至善の境界に對して進歩すべきものなれど、小成に安んずべからず。

第二　國家の文化に伴ふため　わが國の文物制度が發達せしことは、今更言はずとも明なり。さるを、女子教育の程度、なほ、往時に異らざるときは、女子の品位の見劣りせらるゝのみかは、折角發達せし國家を永遠に維持することも能はざるべし。況して教育は、社會の變遷に相應じ、且その需用を供給することを忘るべからず。古人いひけらく、歲月は人を待たず。と、實に、歲月に後るゝ人は、所謂時勢に合はざるものとなりはて、遂には、廢人者視せらるゝに至るべし。今やわが國光は、單に東方に輝

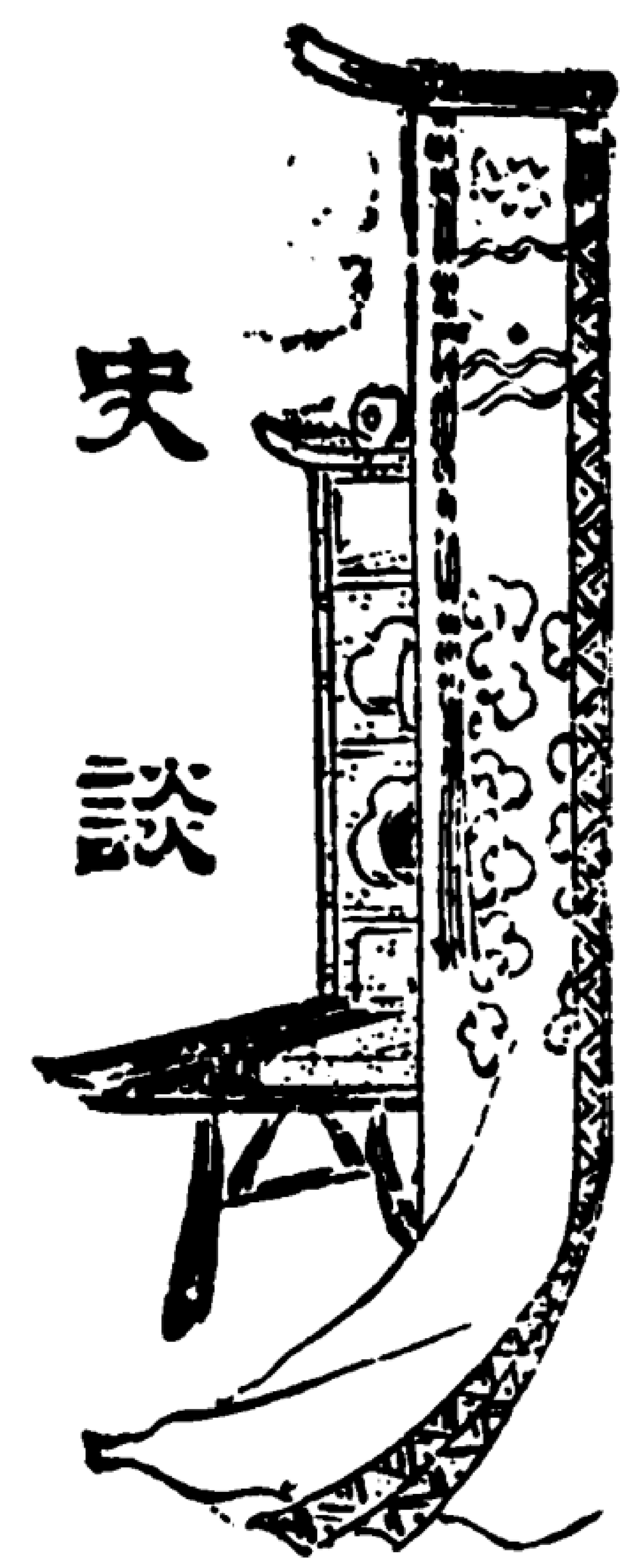
くのみならず、將に全世界を昭らさんとするものを、國民の母たる女子の發達をはからずして可ならんや。

第三　男子との權衡を有つため　女子の男子に於ける關係は、さながら車の兩輪の相離るべからざるが如し。然るに、男子ばかり高等の教育を受けながら、女子に相當の教育なからんか、女子一身の不幸に止まらず。おのづから、雙輪の車の用なきやう、男子もその教育の功徳を人事に施す能はざるべし。剩へ、一家の不和は更なり、一國の教化正しからざるは、男子と女子と教育の程度を異にするに由るべし。如何となれば、教育に懸隔を生ずるときは、自然、思想及び趣味を異にするをもて、良人の是とする所は內君心服せざるべく、孃の欲する事は父これを好まざるべく、將、兄の命は妹怒ることもあらん。甚しきは男子が、教育なき女子を翫弄視するより、淫風も起らんか亦、日時の衣服飲食、あるは兒童を教育する上につきても、男子と女子との意見相同じからざるため、不幸も生ぜん。元來女子の男子に從ふべきは當然ならんも、心中に非と思ふことをば、強ひてつとむるときは、諸事圓滿に行はれざらん。

人あるひはいはん、男子と女子とは天稟相異なるを以て、思想、及び趣味の互に同じからざるは怪むに足らずと、そは理になんあるならんも、天賦上の相違は、長短

相稱ふに足らん。すなはち、男女の特質相待ちてこそ、人事始めて圓滿なれ、されど、教育に等差あるため、男子に賢愚相分るゝに至りては、如何ともなす能はざるべし、されど、女子に高等教育を施すは、その實、男子高等教育の効果を全うならしむるものといふもいひ得ん。

第四　上達の道を開くため　一般の女子教育は、内助に止るべしとは、殆ど天下の輿論なるが如し、されど、更に高等教育を設けて、專門の智識を養ふべき所以の理は、いづくにかある、たとふに、女子教育の要は、内助に過ぎざるも、聖を期するものすら亞聖だに及ばず、賢を希ふものは凡夫にして終るごとく、志を高尚に定むるも、實際平凡に止るは人事の恒にしあれど、女子に高等の學校ありてこそ、實際は尋常の教育普及するなれ。況して志あるものも、上進の道杜絶せむには、自暴自棄に流れ、小學教育だに普及せざるべし。されど、今日のところにては、一般の女子に高等教育を施す必要ありとは、信ぜざれども、上達の道を開くは得策ならむかし。



史談

佐倉宗五郎の妻

鹽井ふく子

下總の國佐倉の里に、宗五明神とて、春秋のまつりも、民のかまどと共に絶えせずにぎはふは、やがて、彼の有名なる佐倉宗五郎夫妻の魂魄を鎭めたる神社なり。宗五郎、本姓は木内と云ひて、下總國印旛郡津村と云ふ村の名主にて、その妻葛女もまた同じ國のものなりとかや。

その頃此の佐倉の城主を堀田加賀守正盛と云へり。十五萬石を領し、幕府の執權にてもとは信州松本に居りしを、寛永の十九年に、此の佐倉城に移り住みたるものなるが、いと賢き人にして、國制國風皆ありしまゝにまかせて、新にむづかしく改むることをせず、租税法度を輕くして、人民をいたはりしかば、國民安堵、五穀豐熟して、民みな萬歲を稱へけるに、慶安四年に、正盛世を辭し、その子上野介正信といふが、家を

嗣ぎけるが、父の勤功によりて、閣老にさへ進められぬ。されど、正信は未だ幼弱なか〱に賢父の後を嗣ぐほどの材なきを奇貨として、姦臣ども擅に權柄を弄し、賦税を重くし、其の年より、高一石に付きて、米一斗二升を増し、それを標準として、人みな加税せしめ、民の膏血をしぼりて、ひとり己が懐中をあたゝめんとしけれど、民たちは其の困苦み云ふばかりなきに、郷村協議して、遂に之を藩廳に訴へ、租税をうすくせん事を願ひけるが、藩廳はいつかなきかず、しかも、小民の服さゞるは、畢竟、村長の取り計ひのあしき故なれとなりとて、或は手錠をかけ、或は市に拘留せられなどするもの多きに、村長等は、今は云ひ出る事も叶はず、農民をさとして、泣く〱重税を収めさせしに、狐臣が欲心はいよ〱増長して、翌年には、また小物なる大小豆の類にさへ、過分の割付を命じ、昔より更にためしなき重税なれど、小民の困難はます〱甚しく、妻子の骨を削り、肉をそぐばかりにしても、なほ租税を収むる態はず、さては、もとより父母妻子を養ふ能はぬに、是非なく泣きて祖先の田畑を賣り、一家の墓地を離れて、他國他領へ轉り住む者あるより、戸口は、年々に減じゆきて、田畠は頻りに荒地となり、太かも、庭田荒地の検査を願ひ出づるも、更に取り上げらるゝ事なく、其組合の民どもにて辨納すべしなど、朝に夕に無法の政のみなれど、残る

村民の困苦は云ふばかりなく、さばかりめでたかりし國内、旱雨のわづらひもなくして民多く飢ゑ、朝夕の煙りも心細く、はてはのぼりも絶ねんとするに、各郡の名主共一同相集りて、かゝる上は藩廳に屆け出で、一同此の地を立ち退くのみなりと決したれど、數村の戶口一時に轉ずる所なければ、これまた困じはてゝ、其の年は泣く〳〵其のまゝにくらしぬ。翌年に至りては、狐臣またます〳〵獸欲を巧しくして、重税を三度さへに納めさせんとするに至りぬ。

あまりなる藩廳の逆政に、今は、さすがに堪へかね、各郡の名主共、凡そ三百八十九人集會し、いよ〳〵出訴に及ばんとて、まづ支配人の代官手代等へ多くの金錢をつかひて、賴みけるに、元より虎狼に仕はるゝ官吏なれば、よろこびて之をうけ、委細を口に承諾し、片時も早く願書をさし出すべきよしを云ふに、正直なる村民どもは、詐りの言葉とも知らず、名主どもゝ大によろこびて、速に願書をさし出して、雨露を待つ旱草の思ひもたゞならず、早く租税ゆるびの沙汰をと待ちこがれぬるに、もとより下意を取り次ぐべき代官等の心にあらねば、曖昧の中に空しく願書はうち捨てられてやみぬ。

今はとて、村民一同連判して、郡奉行和田兵太夫、大野曾平、勘定頭稻葉十左衞門等

に訴へたれど、之もとより虎狼の頭のみ。いかで取り上ぐべき者かは。速に却けて顧みざるに、一同さらばとてまた家老金井七右衛門に訴へしかど、さる事は我々の知らざる處、郡の事はよろしく郡吏にはかるべしとて、これまた取り上げざるに、一同は唯血の涙にむせぶのみにて、よき思案もなき折りから、一人の云ひ出るやう、此の上は是非なし、江戸表へまかりて、直訴するより外なしと云ふに、宗五郎もとより同意すると雖、村民みな一味徒黨すと聞ゆれば、そのまゝには捨ておくまじ、されど、此の多數にて共に計らんよりは、よろしく數人にて、ひそかに事を謀るにしかずとて、各郡より總代六名を擇ひて、密に江戸に上りて直訴すべきに一決し、宗五郎も六人の中に擇ばれ、しかも其の首領に推されぬ。

宗五郎は、深く意を決する所あり。豫ねて妻女を去りて、つながる罪を逃れしめんものと思ひ、密に離縁の狀をしたゝめとらせて、家を出でんとせしに、妻女之を見ておどろき悲しみ、妾は不束にはあれど、未だ君に去られ侍るほどの罪ををかしし事をおぼえ侍らず、またよしやいさゝかの罪あらばとて、事のよしを敎へたまはで斯く情けなく捨て玉ふべき君が平生の志にもあらず。こはよく〳〵思ひ定め玉へる此度の大事、まさかの御時はいさぎよかるべき御身の後の罪の、妾にまでかゝらむ事を悲しみ

玉ひての御事ならむ。されど、わが夫、ろは有り難にて妾は露も有りがたからず。道理にてなか〳〵に道理に侍らず。思ひて見られよ。わが夫が形見の子供等が玉の緒た、つなぐべきものにも侍らば、君が言葉を道理ともきかむ。されど、斷つとも斷たれぬ親子の血すぢ、甲斐なき女子ばかりは助かる事あらむとて、血すぢの男子をいかで救ふべきことかは。わが夫、もし村の人々のために命を終らせ玉ふとならむ、妾もその妻、同じく村の人々のために世を終らんのみ、幼きものとて、おなじ道にはつる方まさりなんに、とまれ、かくまれ、去りなせそ、去られなされそと親の嫁がせたまへる我が夫。我が夫を去り、我が夫に去られて、妾は何處にあるべき。世にも侍るものかはとて、遁せし文を火の中に燒きすてければ、宗五郎もその心ばへをよろこび、今は妻子も後もかへりみはせじとて、承應三年十一月わかつきの露深く、互みに袂なしばりて津村の里をば立ち出でけり。

さて、その月の十六日江戸に着し、堀田正信が辰の口の屋敷の門前近くたゝずみけれど、下座見の士卒等、叱咤の聲いかめしく見とがめけるを、宗五郎心をすゑて、之は下總の農民、直きに御願申たき事候て、下民のためにまかりこし候ひぬと、おくせず申入れしに、さらば裏門より入れよとあり。六名即ち裏門に廻りて、命を請ひけるに、翌

十八日青山の邸に來れとありけれど、六名はひたすらに其の日をまち、朝早く青山の邸に至りたれど、さる事は地方の事なれど、我等の直に知る事にあらず。とく〳〵歸村すべしとて、すげなくれし歸されしに、六名今はとりつかん方なく、途方にくれけるを、いかで此のまゝに止まるべき事にあらじとて、なほ願書をしたゝめ、その月の廿六日、久世大和の守が登城の道に待ちて、六名願書をさし出せしに、こは狼藉、さがれ〳〵と罵るを、我々村民のために願ひ奉る事あり。御聞き入れこれなくぞ、唯死するの外なしとて、涙をこぼして平伏せしに、久世殿もあはれとやればしけむ、籠をとゞめられ、願書をこゝへとて召されて、通り過ぐされしに、六名はよろこび、旅宿にありて、ひたすらに命をまちけるに、我が領地の事にあらねばとて、またもや空しく願書はさしもどされぬ。

六名は困じに困じて、たゞ此の上はいよ〳〵將軍に直訴して、あはれみ請はんより道なしとて、十二月廿日、東叡山寛永寺へ、御成の時をまちうけて、願書をさゝげしに、あるまじき事とて、供御の人々いたく罵り退くるを、我々が命はもとより期したる事なり。たゞ尊民が命をあはれみ玉へと云ふに、時の將軍家綱公、籠の中に御言葉かけられけれど、供奉の人、願書をとりて、宗五郎をつきのけてこそ行き過ぎたれ、宗五

郎六人は有りがたさに、大地にひれふして暫時は其のわとを伏し拜みて、それよりは如何なる命の下るらんと、一日千秋の思ひにてまちわぶるほどに、將軍、その願書を老中月番井上河内守に渡されれ、堀田正信につげられけれど、正信、たゞ恐れ入りて、まかり退き、己が邸に歸り、江戸家老を召して、村民どもが願ひを、よくも聞き正さずして、わながちに退けし不注意を責め、宗五郎等を屋敷に入れて、れろそかならずあつかひとゞめよとありけるを、奸臣はあは巳が奸惡をれはひて、さまぐ\とつくりかまへて、罪を宗五郎に歸しぬ。正信幼弱、紫がわけを奪ふの言を正す能はず、つひに奸臣の言を信して、大に怒り、宗五郎を罪にれとしけるに、狐臣いよく\法を巧ましくして、宗五郎夫妻を磔に、その子四人を斬罪に處すべきよし詮議し進めしに、正信公の曰く、宗五郎はさもわるべきとも、妻子をまで極刑に處するは、わまりに苛酷なり、たゞゆるせよとありけるを、人面の狐臣、君が仁意はさる事ながら、夫のかゝる奸惡をくはだつるな、妻の身として知らざるはなく、知りて諫めぬは惡のともがらなり、また其の子幼しとて、大惡の血脈なり。刑せずむ、國制これより亂れ初めんと、辨舌巧ましく言上しけれむ、上野介は、また甲斐なくも其の巧言にたむかられて、遂に臣下が詮議にまかしたるぞ悲しき限りなる。

あはれ、宗五郎等がつくせし心は、徒らにはかなき水の泡となりて、妻子共に法庭に引き出され、各、其の刑罰のほどを申渡されけるに、宗五郎神色自若、きつと官吏をにらまへ、此度の仕置以ての外の事にこそ、我、私欲を以て強訴せしにはあらず、領主の奸臣ども奸曲を擅にして、賦税を厚くし、年々村民をくるしむる事の大方ならざるより、我々名主の役をつとむる身なれど、如何にも之を救はんものとて、哀訴歎願、ある限りの力をつくして、やむなく此の擧にも至りしなり。下くらき時は上より亂はると雖、方今は上下共に闇し、我等親子が命は、もとより期したる事、何をかをしむべき。たゞ萬民の後の辛苦思ひやらるゝのみ。されど、わが魂魄は、如何で死すとも朽つべき。此の上は上帝につげて、眞如をたのまんのみと、覺悟の顔色いさぎよき宗五郎の側に、妻女も露わくれたるけしきなく、誠にわが夫の申す如し。たとへ幼き子供の命を取られ、我が骸骨ひしびしほにさるゝとも、一念はいかで朽つるべき。わが夫と諸共に、必ず天かけり、とわたりても、此の思ひは知らせでは止むべきとて、恨みをかみてまた何事も云はす、一滴の涙も落さす、從容として死をまつ妻を省て、宗五郎も莞爾と微笑み、一念無量號、今此の怨念誰れにか報はん。諸人尊敬の大名も、其の奸臣、親族も、一兩年を出ですして、修羅道へ引導すべしとて、

梅ちりて梢を蓮の臺かな

とくちずさめど、妻蔦女

今日もろともに消ゆるあわ雪

とつゞけつゝ、いさぎよく極刑をうけしこそ、あはれにもいみじうも思はゆれ。時に妻女年三十九、まだ深からぬ秋に先きだちて、枯れゆく蔦かづらもあはれなるに、長男宗平十一才、二男源の助九才、三男喜八六才、季子三の助三才、何れも春なほ淺きみどりの若草、生ひ先きこもりながら、あへなく二葉にて枯れゆきしぞいとをしき。たゞ二女あり、一女は常州信田郡波賀村の農、次右衛門の妻となり、一女は河內郡小野村の民玄番の男藤五郎の妻となりたるのみ、刑罰をのがれけりとぞ。

その後、いつしかと官吏の惡事は上にきこえ、堀田上野介が始終の不取締の段々、幕府に聞えて、風聞よろしからぬに、正信も、やうやくに悟る所あり、奸臣どもの惡謀を怒りて、宗五郎の事件にあづかりたる奸臣二十七名の知行を召し上げ、永の暇を遣はされけるが、世の人につまはじきせられて、何處の土地にも住みがたく、はては誠の獸類のやうなる姿して野に山にさまよひたりけりとか。正信も此の事より、遂に閣老の職を免ぜられ、其の年七月、夫人は狂疾を患ひて俄にみまかられしと云ふ。後公

津村へ高五石面を下され、宗五郎の家名相續を命じ、八月三日、千葉介勝胤の建立ありし將門の祉へ宗五郎夫妻を合せまつりて、口宮明神と稱せるも、實に萬口を敬ひし故の稱ならん。後に、之を宗五神社と改名して、なほその土地の守りの神とあがめられ、遠近より參詣の人、ひきもきらざるぞめでたしな。

彌右衞門が妻

三矢重松

出羽の國庄内京田通加茂村に、彌右衞門といふものあり。近年病身となり、家の内すら杖にすがりて歩行する躰なれど、家業もならざる上に、七十四歳になる盲目の老母あり。かねての困窮いよ〳〵甚しきに、妻一人の働にて家內を養ふ。姑も老病にて身体自由ならず、寺詣など好めど、常に負ひて行く。すべて姑夫に對する道、誠をつくせり。彌右衞門、その數年の辛勞見るに忍びず、或る日妻にむかひて、年來貧窮の上に母も我も病にふしぬるに、其方一人の働にて家內を養ふに、母への孝養まことに感するにたへたり。はたその辛勞謝するに餘あり。されど、かくては、なか〳〵命もつゞくまじ、ひと先親元に歸りて休息すへし。さて、相應の所もあらば何方へなり緣づきて、少しは心のどかに暮すべし。あとは如何樣にも取計ふべしといへど、妻大に悲み、貧

窮は世の常なれどいさゝかも苦しとおもはず、年ごろ心の及びぬる限は立ち働きぬれども、女の身にてかひ〴〵しきこともかなはぬ故に、かくは宣ふにやと涙をながして恨みけるに、彌右衛門重ねていふべきやうなく、默しけり。かくてこの女のこと一村に著しければ、享保二、年大庄屋より領主に言上、數石の米を下し給ひてその行を賞されたりとぞ。



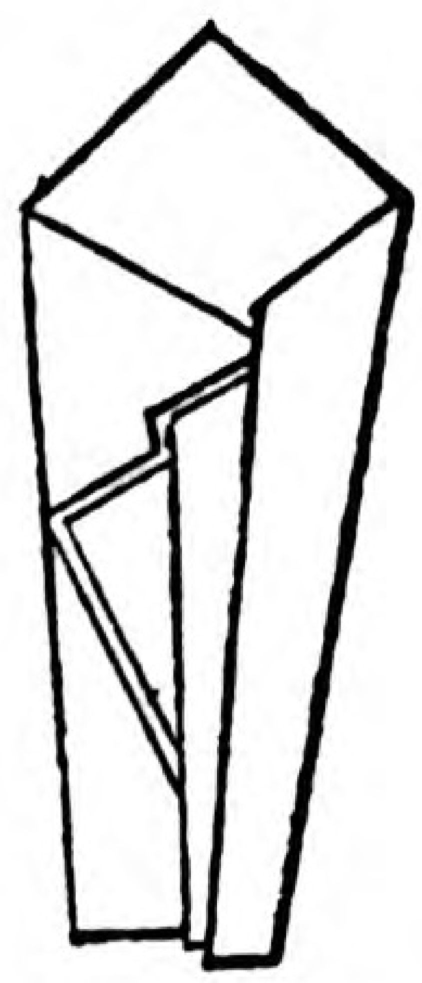
家政

折形

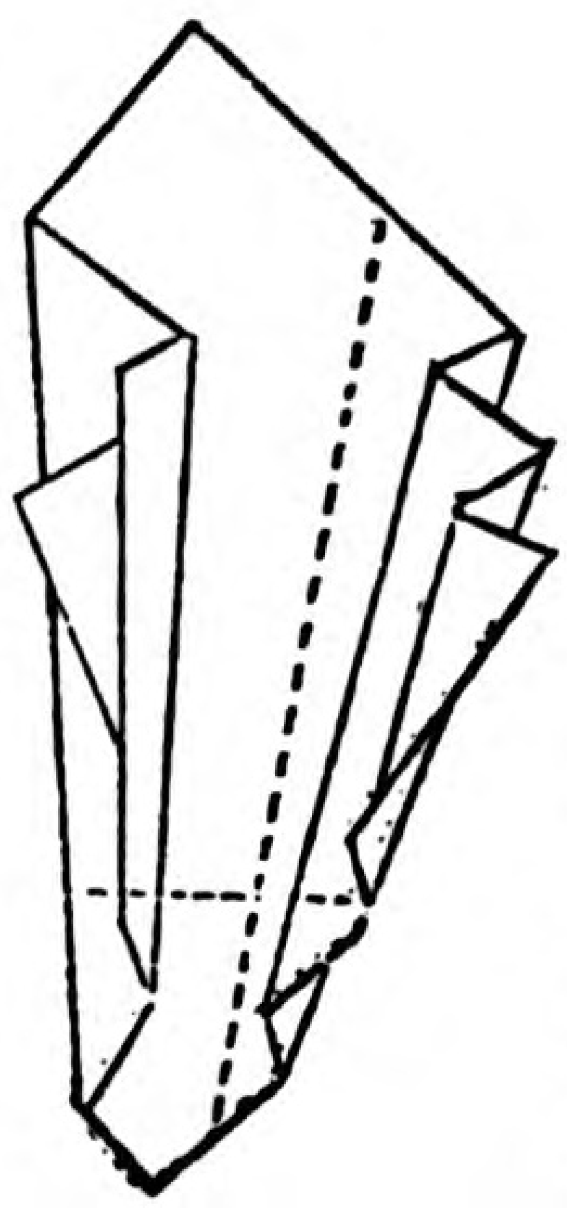
有住齊

草花包

全解

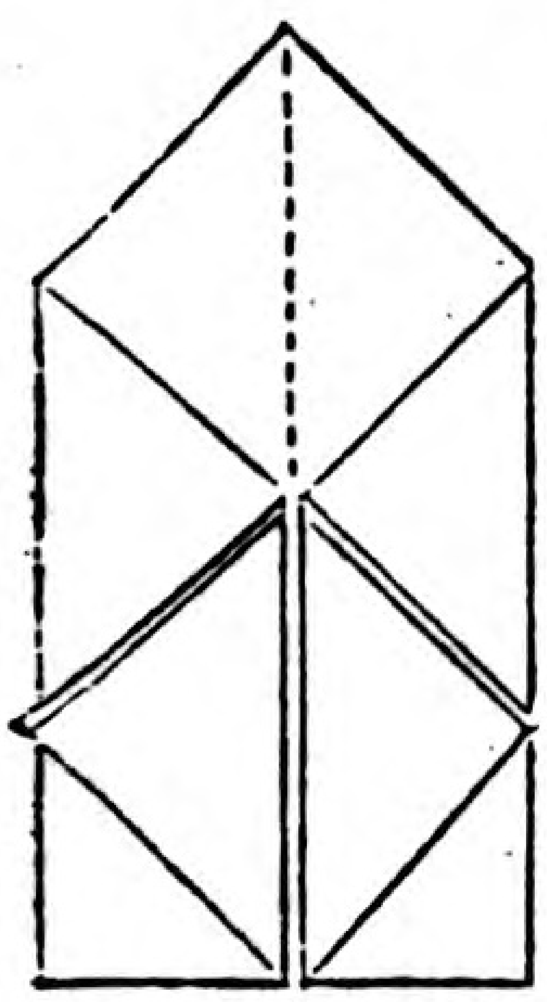


下結をして水引掛ること扇子の如し。
葉先を下にするなり。



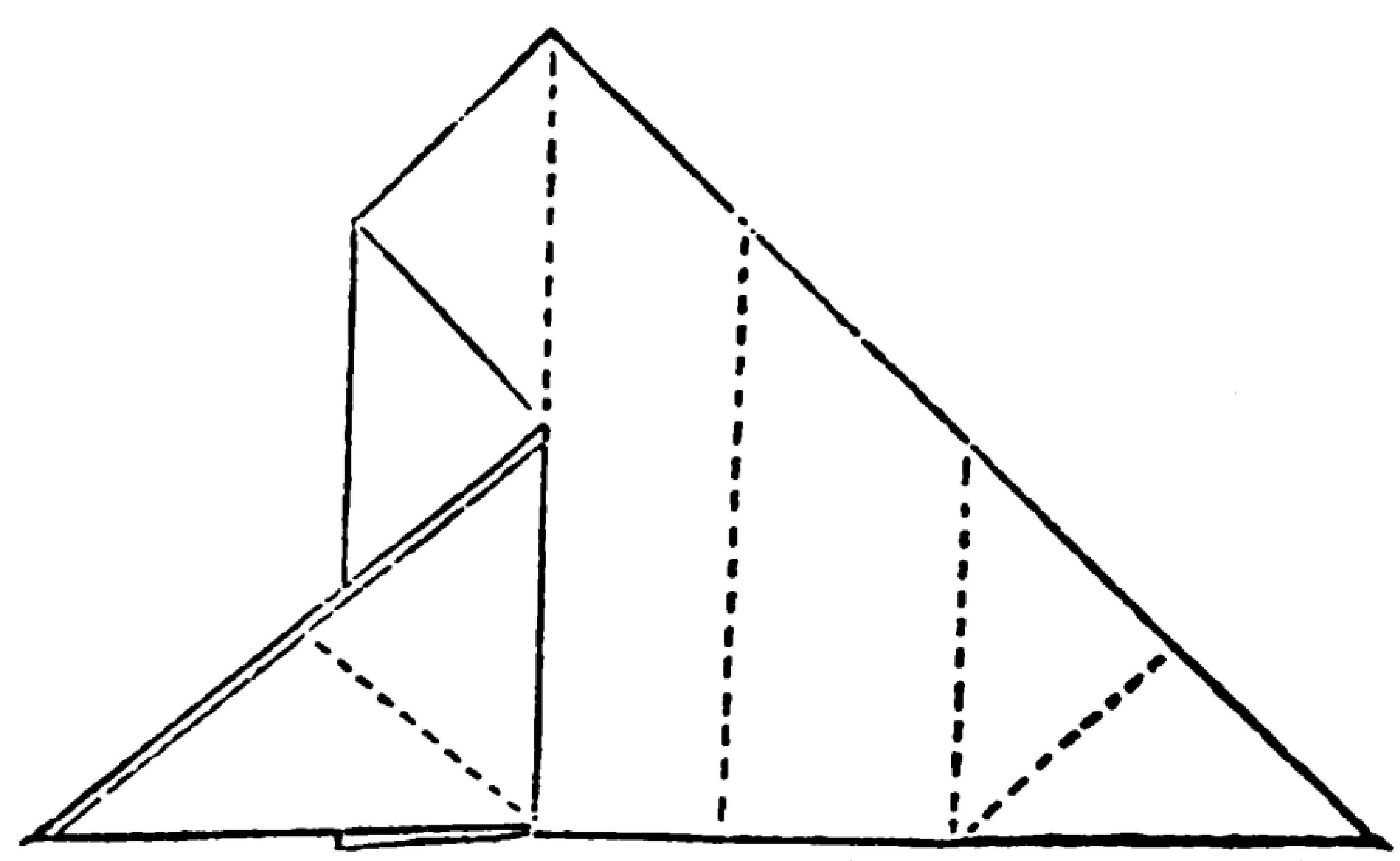
下包其外前に同し。

木花包

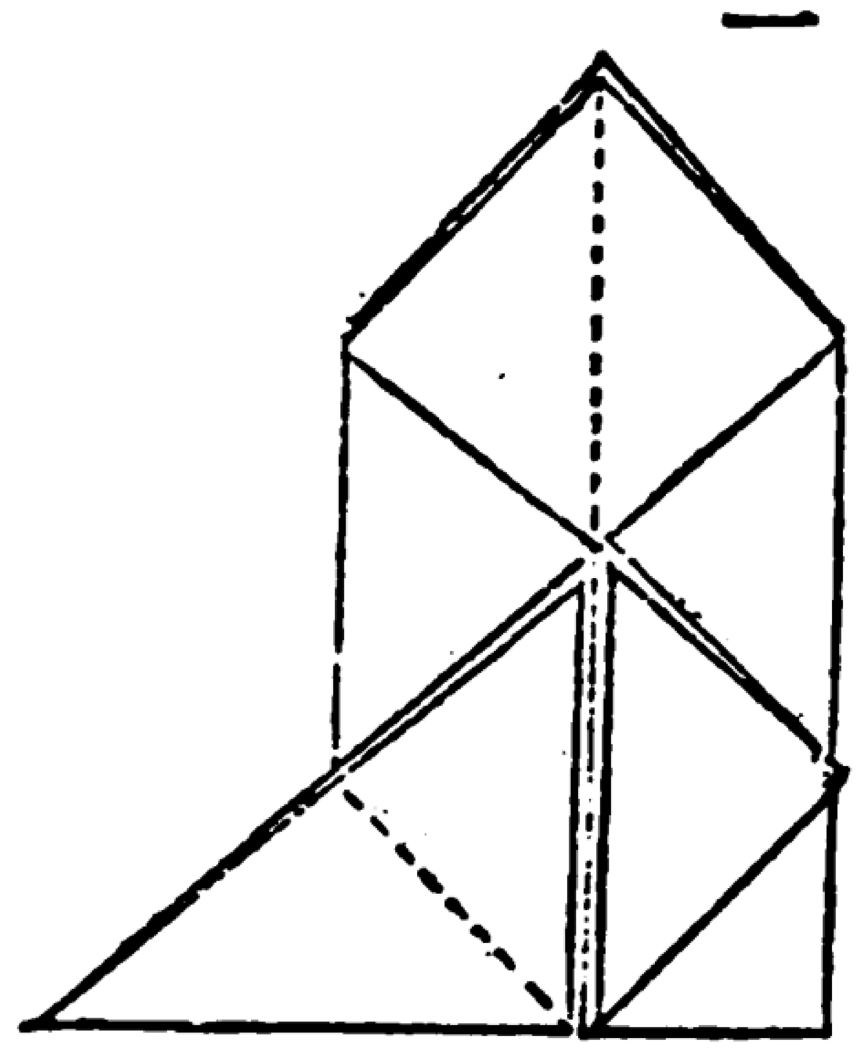


葉先を上にする也。

仝解の一



仝解の二



茶の湯

薄茶手前割稽古手續　　關　葦　雄

千宗易拋筌齋利休居士（泉州堺人幼名與四郎始田中氏）詠茶道歌歌百首の卷頭に「茶の路に入らんと思ふ心こそ是ぞ誠の師匠なりけれ。」と、實に能も心付考へられたり。茶道の路を學び習はんと思ふ心志を惹起せば、取も直さず、是ぞ誠の師匠、則、宗匠を得し成るべし。先茶の手前第一着は薄茶の平手前也（乃世俗の言謂ひ手前の事也）雖然、單に是を施行すること能はす、奈何となれば、薄茶一服の手前に手數を擧げて算すれは、五十有餘の多きに至れり。一々此手付は斯の如し、此の進退は斯樣々々と、唇舌に辨し、手付に行ひて敎ゆる共、初學の輩、容易に之を解釋し難し。仍レ之、此中最

必要の箇所を撰拔し、割稽古と唱へ是を可レ爲。先以帛紗捌茶筌湯治茶杓の拂拭茶筌すゝき等を分豁し、釜に不向して行ふを云（當流特別の傳又予か發明をも加へたる所なり）是を熟練して後始て釜に向ひ、一服の薄茶を點る事を得せしむ。偖、其割稽古を爲の茶具は帛紗、棗、茶碗、茶杓、茶筌の五種とす（但帛紗は紫色を尋常とす男女相通して此色を用ゆ眞紅は婦女或は極老少年の者用之）其帛紗の地合は鹽瀨織を上品とす、裁縫は三方は縫くけ廻し、一方は地合を竪に折返したるもの也。此折返したる方を左に成し、中へ二つに折、右へ引出し、又二つに折、又右へ引出し、二つに折、合せて八つ折と成る。是常に疊置折形也（當流は古實）平素紙入に入、又帛紗に狹み納め、疊紙の間に入懷中するも無妨、而て割稽古に着手するには、茶碗へ茶筌を入（但茶椀の眞中へ穗先を入軸は茶椀の縁へ持せ掛る）其半部の眞中へ眞直に茶杓を掛くる（但茶椀向の縁より前のふちへ持せかくへし）而して炉風爐其時に隨ひ大概置處を假定し置樣は、棗と茶碗と相對す、是を兩器と唱（但兩器の中間疊目五つ四つ位の中兩器の大小に應し見斗へし）扨、又、身体は疊一枚の正中に据り、足は婦女子は爪先を不レ重居敷を足の裏に乘せ正身端坐、不レ得二左ニ側チ右ニ傾キ前ニ跼リ後ニ仰一ク、要レ介二耳ト與レ肩對シ鼻ト與レ臍對一セ、肩腕を不レ張、又垂て横腹に不レ付可レ在二其ノ中間一。手の置所は、膝先より僅少引込、爪先に心を用ひ平等に可レ置、唇齒相ヒ着ケ、目ハ須二常ニ開一、鼻息微ク通シ、身相既ニ調ヒ精神は柔和純良ならしむへし。而して後右手にて帛紗を取、左手に乘せ、折目の二つ目を右手にて取、左手は直に其向の方を持引張、角を持右手其側に運ひ持込居て、左手又引張、角を持、右手に持込たる所後の一ッ角を放し、角違に二ッに折、（但帛紗の表の方表に出る樣注意すへし）左右の手にて平等に引張二つに折、左の手にて左の腰間の帶に狹むへし。（但男子は下より狹み婦女子は帶の幅廣き故帶の上より狹む不落樣注意すへし）右手にて

茶碗の前の方茶杓掛りたる直脇を持、膝の正中央にて左手にて茶碗の左の方中程を持、右手を僅少向へ送り、右の方茶碗の中を持、膝の前に置。但此時茶椀の前へ棗を置故其見斗して置べし其右手にて直に棗を持 但甲の上より中月に取持へし尙口傳 茶碗と膝との間に置、左手にて帛紗を帯より取、左の膝頭の邊にて右の手を出し、帛紗の上の角一ッを持左手を放し其手直に帛紗をしごき下けて直に其手にて下の方の角を持平等に引張左右の手を一所に寄塵打すへし。但左右の手一所に寄爾大拇指爪の處を向合せて后左右へ引張拂ふへしポンと微音ある樣にすへし尙口傳 直に前の方より左手拇指と名差指との間にて向へ二ッに折、二寸程しごき下げて餘る向の方角を左手四本の指先にて前へ打 但三ッ折になる 中程迄しごき下け、左手の拇指へ掛二ッに折、左手四本の指先へ掛、右の手上より抑へ二つに拆、右手にて帛紗を持左手は貫取左手にて帛紗を持、右手の下の方へ二つに折籠、右手にて持

但此時右手名差指帛紗折目の中に殘り中央より膝の上に往なから此指を貫取へし尙口傳 膝の上に準へ、左手にて棗を横より持上、膝先の中央へ持來り、向前と二つ拂拭ふへし 但蓋甲の上に假名のこの字なかく心持たるへし尙口傳 直に帛紗を甲の上へ載せ、右手掌中にて向へ拭落すへし又帛紗は最前の手振に持、膝の上に準へ、棗を始め茶碗置たる所へ置付へし、右手の帛紗を左手の掌中へ廣け直に上の角を取如始疊直し、左手に置、右手にて茶杓を取、帛紗の上へ俯て乘、左手の拇指にて帛紗を折込 但此時同時に茶杓の具先起る尙口傳 向へ一篇拭ひ次に茶杓横に傾け、横を一篇拭ひ、又茶杓を平等にして向へ一篇拭ふへし。但此時は右手にて持たる茶杓を不搖左手の帛紗を向へ運ふへし 拭ひ不切帛紗の中にて横の方より茶杓を出し棗の正中に眞直に置へし。但し向の方より前の方へ置くの心持あるへし 直に右手にて茶筌を持 但茶筌の軸節の處を持 棗と相對して置合べし 但茶筌置付には茶椀の中より茶筌相對し置付る迄の途中にて自然に筌茶を直立せしめ何邊にても直立したるさ餘不立樣に注意すべし 直に右手にて茶碗を持、

僅少前へ寄せ置付、左手に持居る帛紗を一つ開き打返し、上の隅を取引立二ッに折、左手にて腰間に付へし。

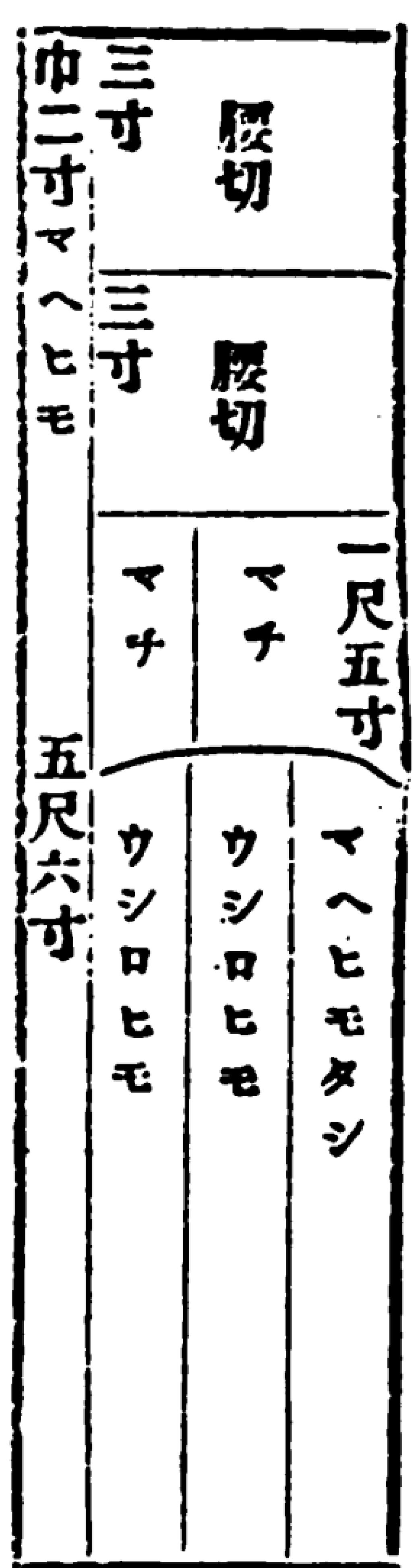
（以下次號）

孤峯庵不羨闌葦雄

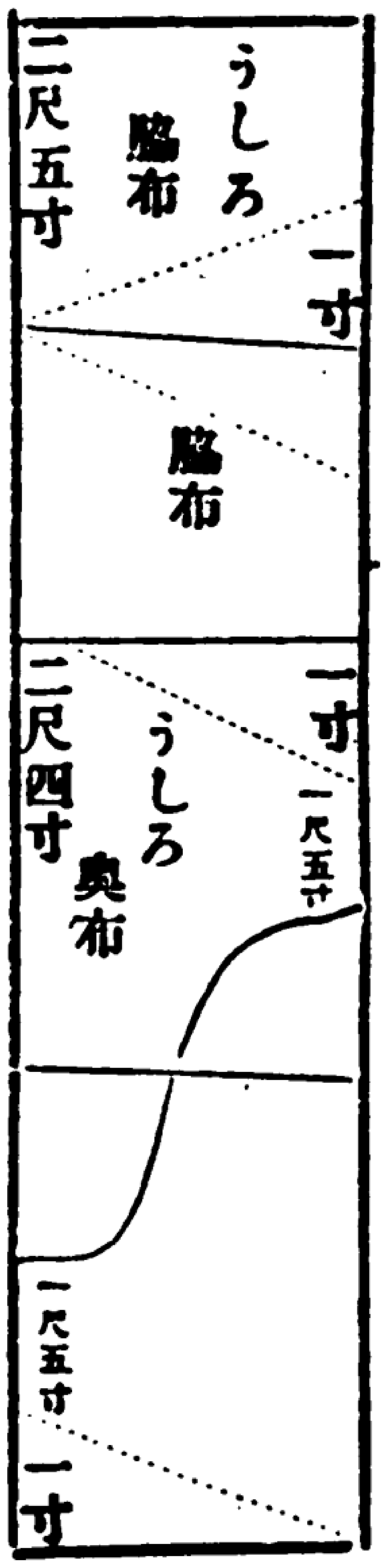
たちぬひ

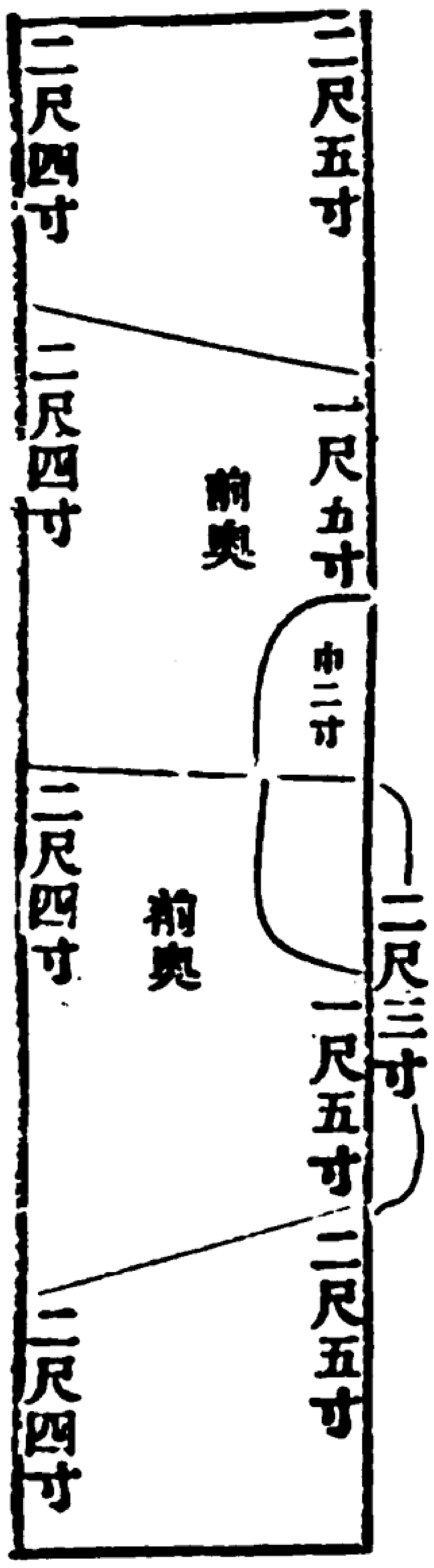
西山たい子

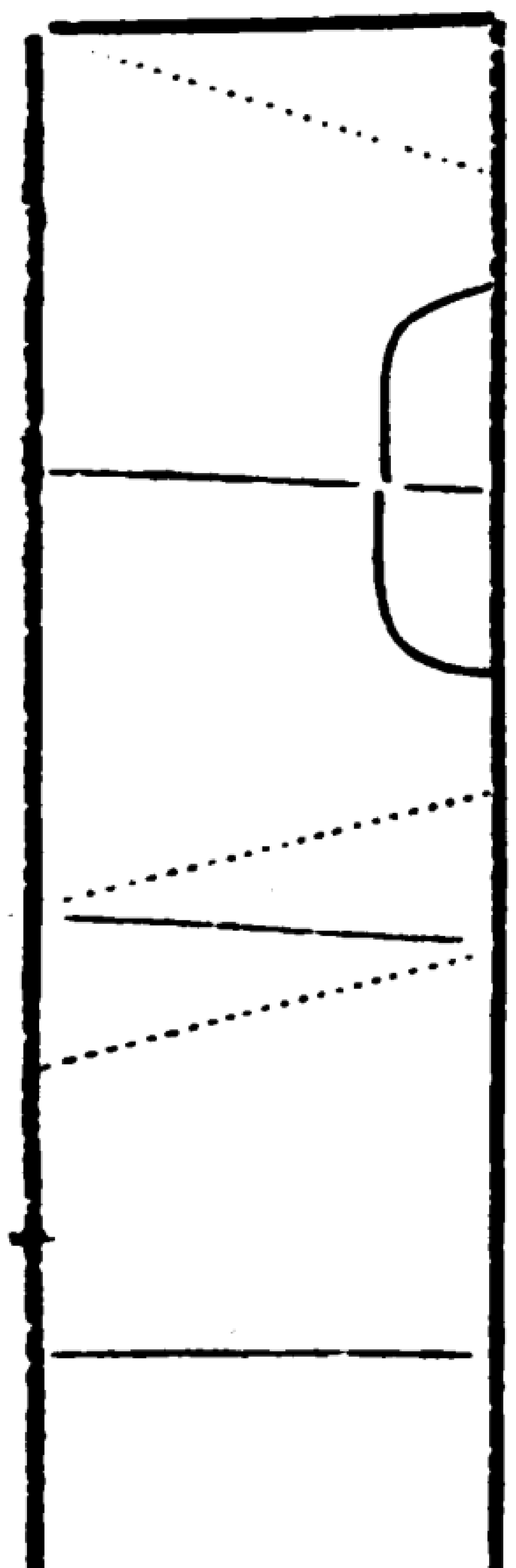
（七十四）大人襠高袴の裁ち方



まづ圖の如く、後の切九尺八寸丈をとり、眞二つに切りて、後脇と奥布との二つとなし、その奥布の方を圖の如くかきて、そのかきたるものよりセミをとるべし、また……の系は裾の方をすぢかひにかきとるなり。それより前の切れ九尺六寸をとり、また眞二つに切り圖の如くすぢかひに裁ちちかへて、前脇、前奥二つに裁ち、その奥布の方をも圖の如くまたかきとるべし、此の如くにして前を切り違るときは無用の切りかき出でずして、丈け長く出來るなり。







此の如くして裁つものもあれど、かくては裾の方よりかき切れ多く出で、ためわろし。前後を裁ち終らせ、その殘りの切れより、二寸巾を縦に眞直にかきとり前紐となし。その殘りより腰切をとり、その殘りより後紐をとり、また殘りより襠をとり、その殘りを前紐のたしとすべし。圖を見合すべし。

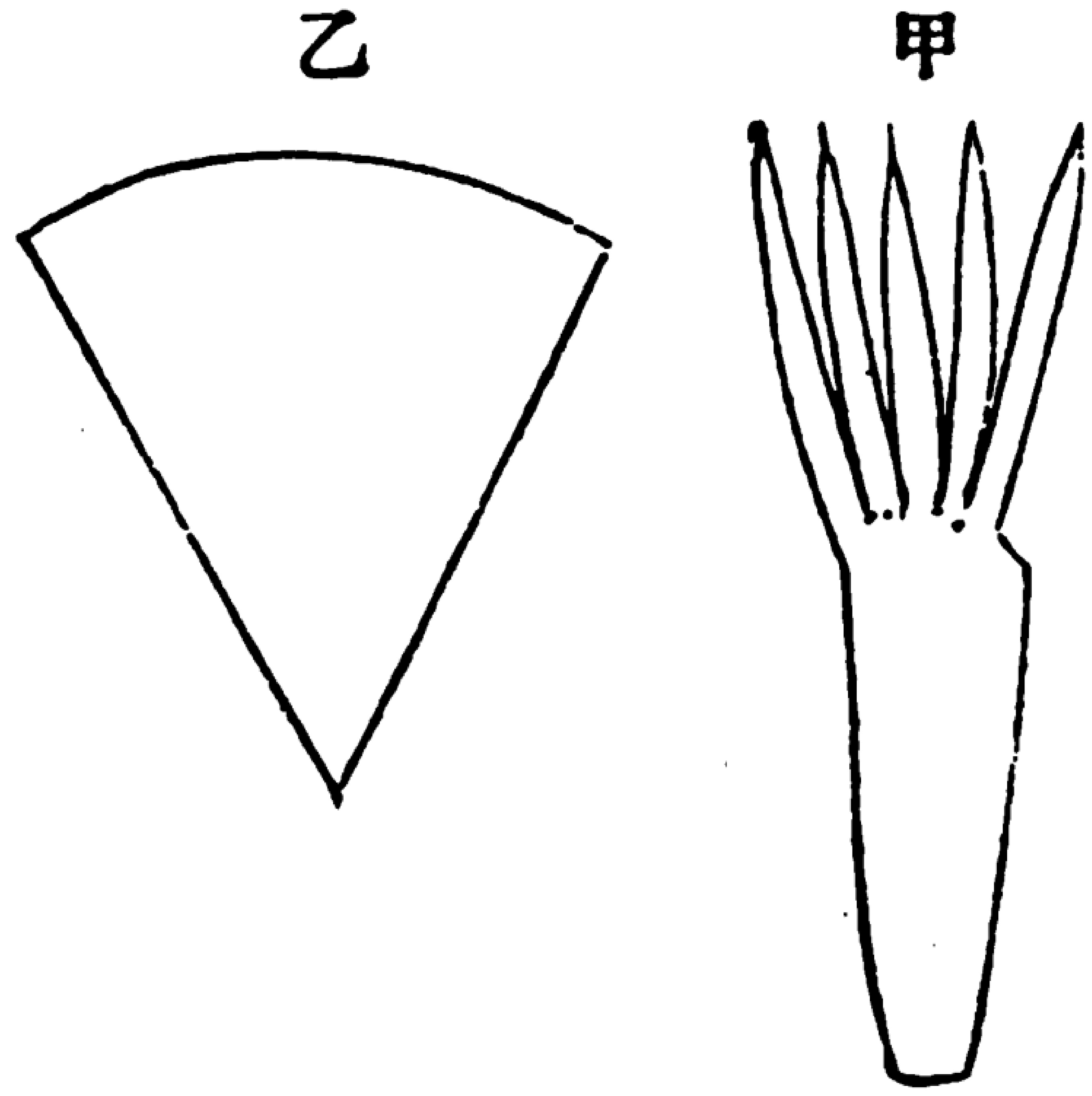
造花

共立女子職業學校教授
伏見藤三郎

朝顔

滿開花の造り方　花瓣には、絖に薄糊を引きたるもの、又は寒冷紗を用ゐて、第八十九圖の如く、甲乙二種の形に斷ち、甲の一端(切込の無き處)に糊をつけて

第八十九圖



他の端に着け、圓く筒の形となし、上部の五つの片片には名々乙を一枚づゝ着け、その乙と乙とを糊にて續ぎ合すべし。色は一樣ならざれど、好みによりて適宜に染むべし。紫なれど「ビオレット」等、その他各種の色染法は既に始めに示したれど、こゝに

かゝげず、

蕚の造りかたは、すべて、百三十一號に示したる霧島と仝じ。造り上りて后全体にうすのりを引きて、綿の細かく刻みたるものをつけ、うぶ毛の如くすべし。

蘂は、カタツ糸の先に、山吹の眞（枝の中に在る白き眞）を薑擦にて細かくれろしたるものを糊にて付け、五六本を束ねつゝりて花に適當したる長さに斷ち、瓣の中に差し込むべし。

蕾の造りかた　は霧島と仝じつくりかたにして、少しく先を捻りて細長くつくるなり。

葉のつくりかた。　葉は、寒冷紗を、なみの葉色に「オウラミ」七分「グリン」二分五厘「マセンダ」五厘を混し、明礬少許を加へて染め、乾して后、實物に合してその形に斷ち、裏より針金に青紙を巻きたるものをつけて柄となす。尚、筋鏝にて實物の通りに筋を施すべし。

第九十圖



茎は、青紙を、「コセンダ」と「ビオレット」とを混じたる色にて染め、針金の上に巻きて適宜の處に以上の、花、葉を配合すべし。第九十圖參照。

だいどころ

ガランテー

鷄の羽毛を去り、毛焼をなし、頸、兩翼、兩足を切落し、他はまるのまゝ、胸の中筋より刀を入れ、眞直に下腹の方にきりめをつけ、夫より少しつゝ、皮を剝き、骨と肉とをきりとり、皮を破らざるやう、注意すべし。體の肉をからになし、皮のみを存して、水にて能く洗ひ、水氣を拭ひ置、夫より犢の肉一斤を細かにきり、古き麵包半斤を水に浸し、手に握りて水氣を絞り、能く揉みくづして前の肉とつき交せ、能程の食鹽を和し、尙よく交せ、搗肉を製し、鳥の皮の中に詰め、凡そ半分程詰めたる時、煠でたる鷄卵の殼をむき、之れを胸より臀まで並べ、尙其上に搗肉を詰め、皮の合目を絲にて縫ひつけ、之れを布巾に包み、其上を麻糸にて巻き、其儘煮鍋に投れて二番(ツースを)注ぎ、凡そ二時間程文火にて煮るべし。煮熟りたれば取出し暫時壓を置き、恰好を直して、布巾を去り、絲を拔き、小口より薄切になし、其三五片を皿に盛り、菓物製の「ゼリー」などを附添て用ふべし。之れは面倒なる料理なれ共、其きりたる小口の外部は鷄の皮にて包み、其次に肉あり、なかに鷄卵の切口あれば、倚麗に見ゑて躰裁よく、食して風味よければ、珍客に供するには妙なり。但し肉と麵包の量は、鷄の大小によりて割合を增減すべし。



學園

秀歌集(三)

墟井ふく子

大津皇子贈石川郎女御歌一首

あしびきの山のしづくに妹まつと
我れ立ちぬれぬ山のしづくに

○足引の山の裾の長くなぞへに引きはへたるを云ふ。故に山にかくる枕詞となれるにて別に殊なる意あるにあらず○山のしづく山の草木の露を云ふなり○妹まつと、妹とは妻にても姉妹にても、はた語らふ人にても、凡て女を親しみてよぶ時に云ふ詞なり。まつとの下にてを加へて見るべし。吾たちぬれぬ、吾はたちて居りてぬれたといふ意なり。

○一首の意は、阿前の來るのをまつとて、久しき時の間、吾は山に立つて居て、草木の露に、かむかりにぬれたよ。阿前がいたく待たせしもの故に山の草木の露に、かむかりにいたくぬれたよと、れしかへし、れしかへし歌ひしにて、此の歌の意は「妹まつとあし曳の山の雫にわれ立ちぬれぬ」の四句にて盡きたるにて、末の一句は、調を整へんために、前の句をくりかへし添へたるにて、いと調子よく、面白き姿なるのみならず。山の雫にとのみ云ふ中に、自らこぼれかゝれる涙の雫、情の露の深さけしきも匂ひて、限りなき餘情餘韻のこもれる誠にめで度歌なり。

有間皇子自傷結松枝歌二首の中

家にあればけにもるいひを草枕

旅にしあれば椎の葉にもる

○有間の皇子は、孝徳天皇の御子にて、齊明天皇の紀伊の牟漏の出湯に幸ありし時、密によからぬ事を謀りたまへるが、とく事顯はれて、紀伊まで召し正されたまへるとき、その旅路なる岩代の濱にて、御食をまゐらせられし時、今度は所詮罪は逃れじ、生きて再び還らん事もおぼつかなしとて思ひなげかれ、側の松の枝をひき結びて、再び見まほしとちぎらせたまへる時に、よみたまへる歌の中に、此の歌もあり。家にあれば「家に居れば」なり。けにもる飯を「け」は笥とかきて食を盛る器にて「器に盛りつくべき飯を」との意なり。草枕、旅の枕は木などさしかけて僅に假りやつくりて宿りとし、大方は、草をしきてむしろとし、草を結ひて枕となしていねたる故に、草枕と云ふ詞を、旅にかけていふやうなりしにて、故に草枕といふことは旅の枕詞にすぎざりしを、後には、やがて旅の事に云ひなす事もあり○旅にしあれば、「し」は所謂助辭にて、別に意あるにあらず。唯語調を强めんために用ひたるなり○椎の葉にもる椎の木の葉につけるとの意なり。

○一首の意は、家に居れば、器にもつて食事をするものを、草をまくらにする旅なれば、器もあらぬ故に、椎の葉に飯を盛りて食するよとの意にて昔は旅にては、其處にありあふ椎、楢等の細まやかにしげり、平らかなるものをとりあへず折りしきて盛りたる當時のさまを思ひ見るべし。

皇子尊宮舍人等慟傷作歌二十二首の中

ひんがしのたぎのみかどにさもらへど

昨日も今日もめすこともなし

○皇子は日並皇子にて、草壁皇子とも申し、御方なり、天武天皇の皇子なり。尊の薨せられたる後舎人どもが御喪舎に侍宿して悲しみよみたる歌、總うじて二十三首ばかりもある中に、此の歌とぞいと心情深く、あはれにやさしくおぼゑたれど、此處にゑり出しつるなり○ひんがしの、先きにもありしにて、「東の方の」といふ言にて、ひんがしはひむかしの「む」の音の撥ねたるにて、一種の音便なり○たぎのみかど、昔は貴人の家作りには、必ず庭には池ありたり。よく古き物語りなどに見ゆる遣水などいふものは、多くはその池に池より流るゝ水を云ふなり。此の皇子の御庭の池に瀧ありたれど、さてその瀧のかゝりてありたる方にありたる門を斯く云へるなるべし○さもらへど「さむらへども」と仝じにて、伺候して守り居れどもといふ意なり。さむらふ、さぶらふ、さもらふ、みな同じ言にて貴人の側に伺候し守り居るをいふ。故にさる人の事を「さむらひ」「さぶらひ」などいふなり○昨日も今日も、「毎日」との意なりめすこともなし「召し呼びて御用を云ひつけ玉ふ事もなし」との意なり。

○一首の意は、東の方の瀧のみかどに、もとの如くに、斯く毎日伺候して守り居るけれども、昨日も今日も、少しも皇子の御召しになる事もないと皇子のなき事をかなしみしたへる歌にて、唯ありのまゝのさまをうたひたるにて、別に巧みたる所もあるにはあらねど、赤心の限りあらはれて、誠にあはれにいみじく、何となく涙こぼるゝ歌なり。

漫録



雨月物語

上田秋成

青頭巾（つゞき）

山院人とゞまらねど、楼門は荊棘たひかゝり、経閣もむなしく苔蒸ぬ。蜘網をむすびて諸仏を繋ぎ、燕子の糞護摩の牀をうづみ、方丈廊房すべて物すざまじく荒はてぬ。日の影申にかたぶく比、快庵禅師寺に入りて錫を鳴し給ひ、遍参の僧今夜ばかりの宿をかし給へと、あまたたび叫どもさらに答なし、眠蔵より痩槁たる僧の漸々とあゆみ出、咳たる声して、御僧は何地へ通るとてこゝに来るや、此寺はさる由縁ありてかく荒はて、人も住ぬ野らとなりしかば一粒の斎糧もなく、一宿をかすべきはかりごともなし、はやく里に出よといふ。これは美濃の国を出てみちの奥へいぬる旅なるが、この麓の里を過るに、山の霊水の流のおもしろさにおもはずもこゝにまうづ。日も斜なれば里にくだらんもはるけし、ひたすら一宿をかし給へ。あるじの僧云、かく野らなる所はよからぬ事もあなり、強てとゞめがたし、強てゆけとにもあらず、僧のこゝろにまかせよとて復び物をもいはず、こなたよりも一言を問はで、あるじのかたはらに座をしむる。看々日は入果て、宵闇の夜のいとくらきに、燈を点ざれば、まのあたりさへわかぬに、只澗水の音ぞちかく聞ゆ。あるじの僧も又眠蔵に入て音なし、夜深て月の夜にあらたまりぬ、影

玲瓏としていたらぬ隈もなし。子ひとつともれもふ頃、あるじの僧眠藏を出て、あはたゞしく物をたづね、たづね得ずして大に叫び、禿髏いつくに隱れけん、こゝもとにてそありつれど禪師が前を幾たび走り過れども、更に禪師を見ることなし、堂の方に駈りゆくかど見れど、庭をめぐりて躍りくるひ、遂に疲れふして起來らず、夜明て朝日のさし出ぬれど、酒の醒たるがごとくにして、禪師がもとの所に在すを見て、只あきれたる形にものさへいはで、柱にもたれ長嘘をつぎて默しゐたりける。禪師ちかくすゝみよりて、院主何をか歎き給ふ、もし飢給ふとならば野僧が肉に腹をみたしめ給へ。あるじの僧いふ、師は夜もすがらそこに居させたもふや。禪師いふ、こゝにありてねる事なし。あるじの僧いふ、我あさましくも人の肉を好めども、いまだ佛身の肉味をしらず、師はまことに佛なり、鬼畜のくらき眼をもて活佛の來迎を見んとするも、見ゆべからぬ理りなるかな、あなたふとゝ頭を低て默しける。禪師いふ、里人のかたるを聞けば、汝一旦の愛慾に心神みだれしより、忽鬼畜に墮罪したるは、あさましとも哀しとも、ためしさへ希なる惡因なり、夜々里に出て人を害する故に、ちかき里人は安き心なし、我これを聞て捨るに忍びず、特々來りて敎化し、本源の心にかへらしめんとなるを、汝我敎を聞や否や。あるじの僧いふ、師はまことに佛なり、かく淺ましき惡業を頓にわするべきことわりを敎給へ。禪師いふ、汝聞とならばこゝに來れとて、簀子の前のたひらなる石の上に座せしめて、みづから帔き給ふ紺染の布を脫て僧が頭に帔しめ、證道の歌の二句を授給ふ。

江月照松風吹　永夜淸霄何所爲

汝こゝを去ずして徐に此句の意をもとむべし、意解ぬる則はおのつから本來の佛心に會ふなるはと、念頭に敎て山を下り給ふ。此のちは里人おもき災をのがれしといへども、猶僧が生死をしらざれど疑ひ恐れて人々山にのぼる事をいましめけり。一とせ早くたちて、むがふ年の冬十月の初旬、快庵大德、奥路のかへるさに又こゝを過給ふが、かの一宿のあるじが莊に立よりて、僧が消息を尋ね給ふ。莊主よろこび迎へて、御僧の大德によりて、鬼ふたゝび山をくだらねど、人皆淨土にうまれて出たるごとし、されど山に行事はおそろしがりて、一人としてのぼるものなし、さるから消息をしり侍らねど。など今まで活ては侍らじ、今夜の御泊りにかの菩提をとぶらひ給へ、誰も隨緣したてまつらんと云ふ。禪師いふ、他善果に基て迁化せしとならば道に先達の師ともいふべし、又活てあるときは我ために一個の徒弟なりいづれ、消息を見ずばあらじとて、復び山にのぼり給ふに、いかさまにも人のいきゝ絶たると見えて、去年ふみわけし道ぞとも思はれず、寺に入て見れば萩尾花のたけ人よりもたかく生茂り、露は時雨めきて降こぼれたるに、三の徑さへわからざる中に、堂閣の戸右左に頽れ、方丈庫裏に縁りたる廊も、朽目に雨をふくみて苔むしぬ。さてかの僧を座らしめたる簀子のほとりをもとむるに、影のやうなる人の、僧俗ともわからぬまでに髭髮もみだれしに、葎むすぼれ、尾花おしなみたるなかに、蚊の鳴むかりほそき音して、物とも聞えぬやうにまれ〱唱ふるを聞けば。

江月照　松風吹　永夜清霄何　所爲

禪師見玉ひて、やがて禪杖を取りなほし、作麼生何の

所爲ぞと、一喝して他が頭を擊給へば忽氷の朝日にあふがごとくきえうせて、かの青頭巾と骨のみぞ草葉にとゞまりける、現にも久しき念のこゝに消じづきたるにやあらん。たふときことわりあるにこそ。されば禪師の大徳雲の裏海の外にも聞えて。初祖の肉いまだ乾かずとぞ稱歎しけるとなり。かくて里人あつまりて、寺内を淸め、修理をもよほし、禪師を推たふとみて、こゝに住しめけるより、故の密宗をあらためて、曹洞の靈場をひらき給ふ。今なほ御寺はたふとく榮えてありけるとなり。

浮世いかだ舟（續）

作者不詳

大坂下り付大工意見物語の事

今はむかし、うき世坊思ひけるやう、とかくくすしもなるべきものにあらず、是より大坂にくだり、何にても職につきて世をわたらむやと思ひ、だいごちをればつめ、是より伏見に出つゝ、名におふ墨染の井をみれば、いにしへは櫻の名木有て「此春ばかりすみぞめにさけ」といへる歌の侍べり、今は絶えはてゝ井の水ばかりぞ殘りたる。その水淸くわき出てひやゝかなりければ、立寄てくみてのみつゝ、我身によそへてかくぞよみける

世をいとふ人の心にならへはや
　そこゐにごらぬすみ染の水

と、かやうにうちねいじ、六ぢざうをふしをかみ、京ばしにいたり、便船してうちのりければ、せんどうろをたてゝれし出し、淀の小ばしをうち過て、左のかたを見わたせば、城の有さま心も詞もおよばれずきれいなり。つくりたてたるなみきの松は、こず

ゑをあらそふてとり〳〵なり、からかさなりにひらけたるも有、ひしなりなるも有、四角にみゆるも有、色々につくりなし芝つゝみをつきて、こみ木をうゑたる所は花はたけ、とりべやなり、川ぞた石垣の際には世にかくれなき水車、ふたつまで立られ、水にまかせてめぐりつゝ汲いるゝ水までも身の上にゑられてかくぞ思ひつゞけゝる

くみてしる淀の川瀬の水車
うき世をめぐるわが身なりとは

なは、ゆく舟にまかせつゝめでのかたをみれぞ、山崎たから寺、ゆんでのかたは、はとのみね、石清水、これは源氏の氏神正八幡大ぼさつは應仁天皇の御廟はんち彌陀によらいにてれはします。千載集に能連法師が歌に

石清水きよきながれの絶ぞせねぞ
やどる月さへくまなかりける

とよみけん、浮世坊も心のそこに行末をいのりて

世の中をうしとも今はいはし水
ながれわたりを神のまに〳〵

とうちねいじ、橋本を過れぞ程もなくひらかたにつく、めてには三島江、江口の里うちすぎゆけぞ、ゆんてにはさだの宮もこゝなれや、さらしのさと、かすかねの村、すぢりもぢり見わたして入けんやにこぎよせたれぞ、のりあひの人々思ひ〳〵に立わかるゝ。浮世坊は舟よりあがり、今ぞしをうちわたり、からうい橋を西のかたへゆく。鍛冶や町をすぐれぞ、釘かすがいをうつ有さま、ふいごのねを足にはさみ、すみかきよせて吹たて、槌をふりあげやきがねをはさみてうつ音をきけぞ、手と身と〳〵ときこゆ。あないま〳〵しのつちの音や、と、せいをかせぐ者のす

べき事にはあらずと思ひて、そこともなく行程に、産磨の明神に來りつく、此御神は難産のうれひを守り給ふ。そのはんじやう京の泰産のくわんれんと同しく覺ゑたり。六月二十二日には此御神の神事也。かくて、一日二日大阪中をくわんじんすれども更に其日をれくるほどのたよりもなし、是にてはかなふまし、諸職人の中に大工はよきもの也と思ひ、ある人を頼みて大工のでしとなりけり。まづ釿をつかひならへとて柱をけづらせけるほどに、うちはづして足くびをしたゝかにきりたり、日を經てやう／＼にいゑたり。只もとの出家がましじやと思ひて出ていなんとす。れやかた意見するやう、萬事みなはじめは成がたけれども、功をつみてたんれんすれど上手になる、とかく堪忍なければ、いづれの道も仕ならひればゆる事なし、玄な玉をとり手毬をつく、みなこれたんれんなり、まして是ほどの事いかでかれはゑざらん。むかしもろこし郢の國に匠石といふ大工の有けるが、かべをぬるものゝはなのさきに壁のつきたりしを、匠石すなはち釿をもつて壁をけつりれとすに、此者目もまじろかす、かほをもうこかさず壁はあらひぬくふたることとくにけづりれとしたり。物の上手になれど釿をつかふ事かくの如し、くろがねのものさし、つばはずさしのつもりをもつて、大佛殿をもつくりたつるぞかしなど、さま／＼かたりけれ共聞いれず、又すみ染の衣をきてうかれ出たり。

米の直段たかき事付穀象虫の事

今はむかし、浮世坊こゝかしこうかれありきて、ある米問屋の門に立たり。米をかたげ出し賣玄ろなすをみるに、はなはだ澤山なれども一粒をもあたへず、わかき男立出て、是なる法師のさきよりこゝに有て、

出入の道をふたぐ、めんだうさよろこのけといふ。うきよ坊こゑうちあげて、官倉豈無レ粟。粒々藏二珠璣一粒不レ出レ倉。倉中群鼠肥。といへる鄭穀父が詩をとなへたり。わかきもの心ありけるにや、御坊は何をかの給ふといふ。浮世坊こたへていはく、官倉とは大名かたの御倉也。粒々珠璣をかくすとは、その倉にいれおかるゝ米は、直段殊の外たかくて、米のつぶごとみな珠をつみあげたるが如し。一粒くらをいたさずとて、ねだんのたかきがうへにもまたたかくうらんがために、倉の戸をとぢて一粒をも出さねば、まずしきものはうゑにのぞみてやせつかれ、倉中群鼠肥とは、たゝ倉の内にすむねすみのみこえふとり侍るといふ詩の心なり。あるひは又國内米生蟲庫中錢爛レ貫ともいひ。又張籍が詩には、苗踈税多不レ得レ食愉入官倉化爲レ土とつくれり。國内はくらのうちなり、つみたくはへし米は虫を生ずれども出しうらす、庫中錢は大につみあけて、貫たゞれきれても、猶よくふかく。百性がたは、ひそん水そん蝗のために稲をそこなひ、みのる事なく、満作にもなきをせめとりこきとり、年貢をはからせ、ねだんをたかくせんがためにくらにをさめて賣ことなければ、としをこねて虫となり、後には化してつちとなれども、いよ〳〵しめうりにして人の咽をしめらるゝ。虫になり土になる毎年のつひゑいくたくそや。こくざうといふ蟲は米より生するむしの名なり、そのかたちいたりてちひさくいろくろうして甲有、甲の下につばさ有、力はなはだつよし、せなかより此むしを推時はさらにくだくることなし、はなのさきすこしまがりて、ながきかたち象に似て五穀に生する虫なれは穀象と名つけたり。倉に

たくはへたる米の年をこゆれは虫を生す。糠をはなたずしてつみをく時は虫わかす此ゆゑに今はぬか共に倉にをさむる米も有、とにもかくにもねだん高くうりて金銀おほくとらんとす。米より生して米をくらふ穀象とは、たゞ是虫のとかにあらず、米をうらぬよりてこれぞ、うらすして虫をわかす家はすなはち是穀象なり。もろこしの堯の代に九年洪水有けれ共國民みな山に住ながら九年のたくはへたゝしうしてうゑたる民さらになかりしとなり。殷の湯王は日でりを歎きて身をやきて雨をこひ玉ふ。唐の太宗は蝗をいきながらのみて田の損する事をかなしみ玉へり。其外の諸國太守みな國民をいたはり百性をめぐみ給へり。たとへぞ人有レ飢にのぞみてわが股をそぎて食す、腹にはあきたれ共足のたふるゝがごとし。國のあるじは腹の如く、百性は足の如し、腹のみふくれても足たゝずしては其かひなし。君大にさかゑ玉ふとも百姓おとろへかじけたらぞ、國をさむるしるしなからん。され共大欲ふかき人は、おほくの米を倉につみて、年をかさぬれども出しうらず。日でり洪水大風をいにしへはなきやうにとのりしに、今のあきんどは、あれかし、米のねをあげんと利分を守る程に、其日すぎのまづしきもの、かせげ共〳〵一升の米のあたひをだにまうけかね、蚊帳をしちにおきては夏の夜をねずにあかし、よるの物をうりては冬の夜すがらこゞへはて、子共を人の被官になし、道のほとりに赤子をすて、まことに年毎の五こくはみのりながら、餓莩すくなからず。あはれなることかなとて浮世坊なみだをはら〳〵とながしければ、問屋の亭主是を聞て、米たかくしてよろこぶものも世におほし、けしからぬ法師のなみだかな、

米がはしさにながるゝ物であらふとて、一升ばかりとらせてかへしけり。

かたみの蕨（續）

志貴婦遺稿

吾十有五而志于學三十而立

十あまり五つにみちをふみそめて
　三十にたつとのたまひにけり

四十不惑五十而知天命

よそぢにて心さだまり五十年は
　おのつからなる天の身をしる

六十耳順

もとよりも物のことわり別つらん
　六十の耳はあきらかにして

七十而從心所欲不踰矩

七十におもふこと〳〵なすことを
　得たれどのりはこえぬなり鳧

孟懿子問孝子曰無違

世ののりをたがへぬにぞ父母に
　そむかぬ道のしるへなりける

樊遲御

おやこゝろやすかるへきを何事も
　仕へまつるかいやとこそしれ

樊遲曰何謂也

いけるにも死にも後にはうむるも
　父と母にはいやをつくせよ

孟武伯問孝

たらちねは病そのみもいたつきぬ
　やすからぬ身とおもへ人の子

子游問孝

いやまひのあれなこそ人鳥毛もの
親をやしなふことはしるなり

子夏問孝

いつとても色をやわらけいつくしみ
家族はらからむつはかひせよ

吾與回言終日不違

百千たびそのまゝ御言きくひとは
もとひしりより出てし玉かも

視其所以

つゝむとも心のよるへれのつから
天地ひとのしるそすへなき

温故而知新可以爲師矣

いにしへにわけし言葉のあらましを
今はた道のしるへにはせむ

君子不器

天かした何になしてもつかへなく
よく物にそふこれやうまひと

子貢問君子

うま人は其こと〳〵を務めれきて
のちこそ言にいたすなりけれ

君子周而不比

うま人は月日のかけのへたてなく
てらすか如きこゝろなりけり

學而不思則罔

思ふとも學はぬひとはたど〳〵し
まなへと思はぬ人はをくらし

攻乎異端斯害也已

あるへきをならひて行けは大方は
ならへる道はわれにてそあれ

由誨女知之

しらさるをしらすとをせよ其後は
やがてその儘しれるひとなり

子張學干祿

何事もこゝろにねらひつゝしみて
言葉にいたし身にもおこなへ

哀公問曰何爲則民服

まかれるを其儘おきてなほきひと
上にたつれそ民そしたかふ

或謂孔子曰奚不爲政

愛しみうからはらから家もれは
日に〳〵民をなつるなりけり

人而無信不知其可也

まことなき人はなとてか道ゆかむ
横木をいれぬくるまなるらむ

十世可知也

よしゑやし百世の後もいにしへの
其あらましをたくへてろしる

非其鬼而祭之諂

とはつ親か神ならてまつるなよ
世にへつらふと人のみるらむ

見義不爲無勇也

世にすへき道の法ことなさゝれは
勇なしとそいふへかりける

孔子謂季氏

身にれはぬ世にわされきをする人は
君とちゝにもまことなからむ

三家者以雍徹

思ひきや君の御まつりたふときを
おはぬ身にとり計らはんとは

人而不仁如禮何

誠なきひとにはよしやいやまひの
　あはれたふとき道もなにせむ

林放問禮之本

みやひかにとりよそはすもわや錦
　心にころはきるべかりけれ

夷狄之有君

ねみしすら君と臣とのけぢめしる
　深くもひとはわれもはさらめや

季氏旅於泰山

まつるとも神はうけしな道なくは
　なはおそるべき罪やうくらむ

君子無所爭

わはかたのあらそひ事はなかり鳧
　ゆみいるのみを勝まけにして

增補臼挽歌（續）

玉田永教

今日のこの日に復逢れぬと已が仕業をはげめかし。
てらしますこの御影を知らで暮がうか／＼と。
仁愛深うて正直なるはかみのこゝろにかなうぞや。
れのが心の横しまことがつもりつもりて罰うくる。
怒る心がやぶれのもとよみたま淳直にしとやかに。
いはふ言葉も呪咀ふもぐちよいふな筋なき徒言を。
我とわが身を撮みて知れよひとのいたさは如何計。
さむい飢い心のほどを知りてめぐめやしも／＼を。
叩きまはしてつかふな人をつかはるゝ子は猶可愛。
なさけなかりしその罪咎のすゑは身を責子に報ふ。
人を苦しめたからをもつなやがて其の子は門に立。
人の奢はどこともなしに昇登りて落つると知れよ。
榮曜榮華もほどすぎぬれどのちは悲しむ種としれ。

欲と色とは水火のふたつすぎて流れていへを焼く。
からす雀のさへづるこゑを閨で聞くのはみな背き。
緣のむすびは私ならずよいもわるいもかみむすび。
岩堅帶とて五月ならざれびをむすびてひもとくな。
つきのさはりは七日の間こゝろかためて帶とくな。
ひのえうまの日庚の申に帶を解くのは身のどくよ。
地震かみなり大風吹くは天のいかりとおそれみよ。
二十四節のその時時はほねのつぎ目とつつしめよ。
四季の土用に北斗を拜むひとの身に咲く黃金ぞな。
さけは至極の藥といへど過りや其の身の毒となる。
我が身堅固に長生せずぞうまれ出たるかひもなし。
ありとあらゆる其の事々を知ろとおもふは皆迷ひ。
われと我が身の行狀知るを是をもの知る人といふ。
家業精出し實義なものはひとの見る眼の鏡なれ。
たとひ如何樣の事ありとても道にまよふな邪路へ。

儒道佛法ふたつのをしへこれは中ごろ來たものぞ。
國のをしへをいやしむ人は酒によひます唐土酒に。
神のはなしにはらたつものは親を御經で叩くのか。
あすのことより今日こそ大事後の事よりいまの事。
てらや道場は先祖の靈屋まつりどころと兼て知れ。
忌にち命日その亡靈をなみだこぼしてたむけせよ。
かみの御恩と先祖のかげでこの身くらすと心得よ。
神や佛になろとは迷ひとかくまことのひととなれ。
ひとの像はみな人なれどみちにたがへぞ人でなし。
梅に櫻にいろいろはなにうつり安しやひとこゝろ。
わきめふらずに敬まふものはくにの主と我れつと。
せかい萬國國土はあれど日本はどよいくにはない。
東夷粟散邊土といへどくんしごくとてなちびない。
日本の烏が日赤日明と啼は支那の烏にならふたか。
くにの開闢をしへのみちはかみの御文に明らけし。

附録

祝ひうたへよまづ日の本にとしの始の神祭るのは。
天の岩窟にその影はじめいまもかはらぬ神のくに。
稔のはじめの折櫃るとていはひいただくその源は。
諾冊の二尊の瓊矛のさきにたちてかたまる淡路島。
稚産靈のかみまつるのは正月七日のわかなかゆ。（若菜粥）
二季の社日に田畑の神を祭りや穂に穂が咲と知れ。
桃の節句はおはしまさまを女夫まつりの雛かざり。
八十八夜に御日待すれど夏のやまひをよけるとぞ。
卯月八日ははないけたてて花のまつりの魂いはひ。
五月五日は武具かざりかみのをしへのおどぞとよ。
夏越はらひはちとせの命延とこそきけよくいのれ。
天棚機姫様は衣物始神なれど絲け捧げて祭り置け。
生御魂どて指鯖たくるおやこれとどひ身をいはへ。
ぼんの踊は門火を焼いて黄泉門塞がるかみまつり。
二百十日に吹く風どくよたつ田廣瀬のかみいのれ。
八月朔日田の實のまつり初穂さゝげてよくいのれ。
九月九日しらやまひめのちらぬいのちの菊のさけ。
亥の子いはへよ富福智惠祭もちをつくつく福を搗。
神迎へとて社へまゐるこれもかみよのおとぞとよ。
十二月中頃煤拂するはこれも神事のそなへぞよ。
極月三十日は大年神のとしをまもりのかみのおん。
かみのみくにぞ皆いまもまつり祝ひてをこたるな。

（をはり）

高崎正風大人講話筆記（續）

附録

此は談話中のことながら、あるは例證に引かれたる、あるは全く餘話とればしきなど、本文に漏らしつることどもを書き集めたるなり。もとより項

を別ちて述べられたるにはあらねども、今見易からむ爲に條目をたてたり。

○行誡上人の歌の事

上人は近來僧中の歌よみにて、好き歌多し。釋敎百首などにも、まことの歌と思はるゝが少からず、上人の親友、僧辨玉、また歌を嗜む、横濱に住めり。ある時上人の京都へ上らるゝ途次、辨玉を訪ひ、綿子を壹領贈るとてよまれたる歌

横に吹く濱風いかに寒からむ
この綿子きて埋火によれ

此の歌を示されし時、己いはく、此の四五の句眞率にして老友相憐む情愛自ら溢れて感ずるに堪へたれど、初二句の横に吹く濱かぜとはいとことやうなり雨こそは横雨ともいへ、そは雨はまづ縦に降るが常なればなり。風は縦横定なく吹くものなるに、殊更に横に吹くといふことといかが、上人の心を推測るに此は只横濱の紛擾の地なるをもて、その名を避けて殊に構へられたるたくみごとにはあらざるか、それかへりて穏ならず、地名など雅馴ならずとて何かあらむ、たくみてことやうならむよりも、そのまゝいはむかたしかるへし。自然にそむきて構へ出づる時は、そのことわりさへ斯くたじろぐに至る、恐るべき事ならずや。こゝも横濱の濱風いかに寒からむとあらで、誰もきゝ惑ふふしなく、感情言外にあらはれ、めでたき歌なるべし、同じ上人の歌に

埋火のたえたるをつぐ炭はあれど
おこしがたしやすたれたる道

此の歌などは、實に碩德の歌といふべし。此の第四句、もとはおこしがたきはとありしを、同じくは歎辭のやはらましとて、今の如く己改めつ。これらの

外なは

いたづらに枕を照すともし火も
思へど人のあぶらなりけり

又、江島にて風波あらかりし時、舟中にて

法のため身をすて小舟同じくは
このあらいそに朽ちねとぞ思ふ

など、皆、かいなでの口つきにはあらじかし。

○まことの歌

先年來、年々御會始に、人民の詠進を許され、諸國より集り來る歌を一々調ぶるに、多くは千代八千代などいふ詞をもて飾としたるにて、千篇一律なるが多かり、詞の修飾も必要なるものなれども、必詞に悲といはざれども悲しきことを述べがたしと思ひ、嬉しといはざれども嬉しきことを述べがたしと思ふはあやまりなり。今まことの歌をいはむ。

萬葉に防人を送る歌に（萬葉七卷にあり）

ことし行く新防人の麻衣
肩のまよひはたれかとりみむ

此の歌などは、歌學といふこともせざりし田舍の婦人の歌にてはあれど、到底今人の及び難きところなり。又同じ集に（萬葉集二卷にあり日並皇子尊薨去の後舍人等のよめる二十三首の一なり）

ひむかしのたぎの御門にさもらへど
昨日も今日もめすこともなし

此は新に君をうしなひ奉りし時、舍人のよめるにてその居喪の情言外に溢れたり。

右の二首をよくよく味はひ見よ、悲しとも泣くとも涙ともいはねども、親の子を思ひて今日よりはいかにしてかくらさむと思ふ情のあつき、又、臣の君を悼み奉りて昨日迄は日嗣の皇子にて時めきたまふまゝに臣下の御用も頻繁なりしを薨去の後俄に宮のう

ち物淋しく日々伺候はすれども、一向にめさるゝこともなきにつけて、感情に得堪へずしてうち出でたるに無限の妙ありて、きく人をして深く感動せしむるものはそもそも何にかよる、只愛情の極致をその儘述べたればなり。この二歌は實に天地を動かし鬼神を感せしむるものといふべし。すべて萬葉古今などの歌は、人情のたゞ中より出でたれば、人を感動せしむることときはめて深し、よくよく玩味すべし。

○貫之朝臣は非常の豪傑なり

先輩富士谷御杖の土佐日記燈に、紀朝臣の不世出の才を抱きて、榮進せず、卑官にをはられしは、權門に諂らはざりし故ならむといへり。實にさることなるべし、朝臣の清廉なりしことは、かの日記をよみて知らるべし。又古今の序に「今の世の中、色につき人の心花になりけるより、あだなる歌はかなきことのみいで來れば云々」と書けるを思ふべし。これまさしく當世を譏したるものなり、貫之勅を奉じて書けるに、かく忌憚なき言を發す、非常の豪傑にあらざるよりはなしがたき也。又當今の御歌などは長多しとて入れず。さらば、古の　天子の御製は、一首も無きかといふに決して然らず、撰に入りたる御製も少からず、皆左注にゆづりて明に御製なりとはいはず。これ當今の御製を長多しとて入れぬにはあらず、實際は撰に入るべき程の御製のなかりしを知るべし。當時漢學大に流行して斯道衰ふ、朝臣卓然阿世の學を爲さず、時調に逆ひて是等の言をなす、實に胸に九寸五分をさしあてゝいはれたる言なり。ある人の、貫之は日本の聖人なりといひたるもことわりあることばなりけり。

亡き母をおもふ

安藤正次

風、枝頭を過ぎて、花、空しく散り、花、流水にしたがひて、遠く、野外に去る。春光老いて、たゞ、ものさびしく、愁人の心を傷ましむる事、いよ／＼多し。紫の色ふかき菫は、野にはへり。聲うるはしき黄鳥は、樹にうたへり。されど、それも、猶、おもひいづる媒となるぞわりなき。悲しき事の始として、幼き脳裡にきざまれてより、いかにしても、わすれえぬは、四月十七日といふ日なりけり。此の日は、わが、なつかしき母君の、俄にやみ給ひて、終に、果敢なくなり給へる日なり。おもひいづるも、げに、涙なりけり。おのれ、また、七歳のいはけなき程にて、よくもおぼえねど、十六日の日は、母君の御氣色、つねにもましてうるはしく、けふは、村の人々をもあるじまうけせむとて、牡丹餅とかやいふものつくりて、知れるかぎり、人々におくり給ひつ。おのれも、いたくよろこびてき。さるを、人々かへりて後、その夜の事なりしかとおぼゆ。俄に、例の血の道とかやにて臥し給ひしが、幼心地に、さまでとはおもはざりしを。その夜の中にかありけむ。さては、その暁なりしか。遂に、かへらぬ旅路にいでたち給ひぬ。かくとさだまりしときのかなしさは、いま猶わすられすなむ。まして、常に、おのれを、いたくいつくしみ給ひし母君の御心地、また、いかにかましけむ。

あくる日、御はふりのわざ仕へ奉りぬ。村人など、おはく來て、何くれととりまかなふほど、おのれはをさなければ、友とあそびねとて、家よりいだされたれど、あそぶ心地もあらず。たゞ、垣のほとりに

たちて、さくりもよゝとなき沈みてのみありき。さて、その御はぶりのさまは、いと質素なりしが、今も、猶、目にみゆる心地す。佛式なりしかど、伴僧等のうちならしゝ銅鑼のひゝきも、いま、耳にさしあてらるゝやうなり。御墓は、眞菰おひ、川柳しげりたる小川の片はとりにさだめ奉りぬ。われ、その翌年、鄕をいでゝより、春風、秋雨、既に十四年。御墓のわたり、いかなるさまにかなりたらむ。身は、こゝに、二十歳の春をむかへしかども、猶、何のなす所もなき一寒措大にして、歸りて、展墓の禮をもとる能はず。徒に、愁腸を抱きて、心を、天涯にはするあるのみ。亡き母君にそむき奉る罪、さり所もあらず。されど、猶、母君は、おはらかなる御こゝろをもちて見ゆるし給ひなむか。あなかしこや。おもへど、おのれの、常にあそびしは、その小川のわたりなりき。なつかしき母君に抱れて、夕つかたに、螢狩せし夏もありけり。犬におびやかされて、なき叫びしかど、母君おどろきていでき給ひて、犬を追ひやり給ひしも、その土橋のわたりなりき。朝に、夕に、母君は、おのれを放ち給ふ事なく、春の花も、秋の紅葉も、これなくはとやおもひ給ひけむ。あたゝかき恩愛の光は、常に、をさなき身をてらし、やはらかき慈悲の風は、常に、いとけなき心を、春の如く誘ひぬ。この母君逝き給ひてより、われは、再かゝるあたゝかき光、かゝるやはらかき風に浴する事を得ざりき。

母君は、贈從四位勝野豐作ぬしの女にませり。その、家居したまひし頃は、深く、その父君にいつくしまれ給ひきとか。その後、水戸家、仙台家などに仕へ給ひし事もありけりとぞ。其の前半生は、かく平穩

なりしにひきかへて、その後半生は、けだし、不幸淪落の時なりけらし。かの戊午の獄おこり、勤王の志士、前後とらはれし頃、豊作ぬしは、辛くも、虎口をのがれしが、それによりて、家の人々は、皆、楚囚の身となり、備に、獄中の辛酸をなめぬ。母君も、また然りき。さて、そこをゆるされて後も、わが父に嫁し給ひて後も、幾多のうきふしをか經、いかばかりのくるしみをかうけ給ひけむ。ことに、家道の困難にあたり、わが父君を助けまゐらせて、いそしみ給ひし事など、かたり傳へらるゝも、いとかしこし。母君をしのび奉ることに、かゝることをおもひいでては、おのが心の苦も、かつはなぐさめらるゝぞなつかしき。

母君のみすがたは、いかにましゝか。さだかにはおぼえず。されど、容止いとあてに、うるはしくおはしきとか。あはれ、御寫眞のひとひらだにもありたらむには、いかばかりかうれしからましを。

おもへば〳〵、母君みまかり給ひて後數年父君も、亦、世を去り給ひて、身は、是、濁世の激波に簸弄せらるゝ一片葉。空しく、花に泣き、月に泣き、風に泣き、雨に泣き、鳥に泣き、虫に泣き、泣きて、この世にあり。さるを、このけがれたる人世の中にありて、われに、慰安の水と、温籍の熱とを賜ひて、われをして、暗黒の中に、一點の光明をみとめしむべき人は、既に、此の世を去りて、皎潔怜瓏たる神界の人となり給へり。今は、泣きて、天に訴へむか。過ぎにし年の春くれがた、花散りて、水に流るゝ頃は、わが母君は世を去り給へるなりき。再來、この景は、常に、わが心を、悲哀の深淵にみちびく。あはれ、年々歳々の花は同じかれども、歳々年々、人

は同じからざるよ。

明治三十年四月十七日、母君の十四年祭の日、
之をしるす。

笑話

み、か、

今はむかし、さるかたゐなかに住める賤の男ありけり。その父いたづきに罹りて久しくなやみけれど、一族心を盡して看病しけるに、定まる命はもだし難く、遂にあへなく黄泉の容となり果てたり。男大にかなしめども、今はなすべきすべも無ければ、力無く寺にいきて、父のみまかりつるよしを告げ、戒名を求めけるに、僧うけがひて、やがて法春と書き付けて與へたり。男かたじけなみて出で行きしに、ふと途中にて其の讀み方を忘る、斯くては家に歸りて家族に敎ふる事も得ならず、誠に口惜しきものから、如何はせんと案じ居けるに、その近きわたりに、かねて知れる神官ありければ、これに聞きなば解るべしとて、行きて此を尋ねしに、神官此を見て首をひねり、兎角うかゞへ居たるが、やがて、はたと膝をうちて、さてこそ此は彼の祝詞に「天つ罪と法り分けて」といへる法といへる字と、春日明神の春といへる字なり。されど「のりかす」と讀むべきぞと敎へけり。男喜びてたち出けるが、いかにもその讀みかたのことやうにて、さきに寺にてきゝしものとは違ひたる心地せらるゝに、今一度、たれにか問ひ見むやと思ひつるほどに、ゆくりなく、日比ちかづきの醫に出遇ひけり、折りこそよけれと、戒名の書付を取り出してその讀み方を尋ねけるに、此は、はふの字と春の字なり、「はふむる」とこそ讀むべけれど

いふ。男顔色を變へていふ、さきに聞きしは、のりかすにて、これびはほうむるなり。糊糟類むるとも讀むなるべし。いかに我か家貧しけれだとて、未だ父に糊精をはゝむらせしことはおらし、さても憎き法師の惡行かなとていたく腹立ちけりとなん。

才くらべ（三）

蓬生屋女史

紀貫之が頓智

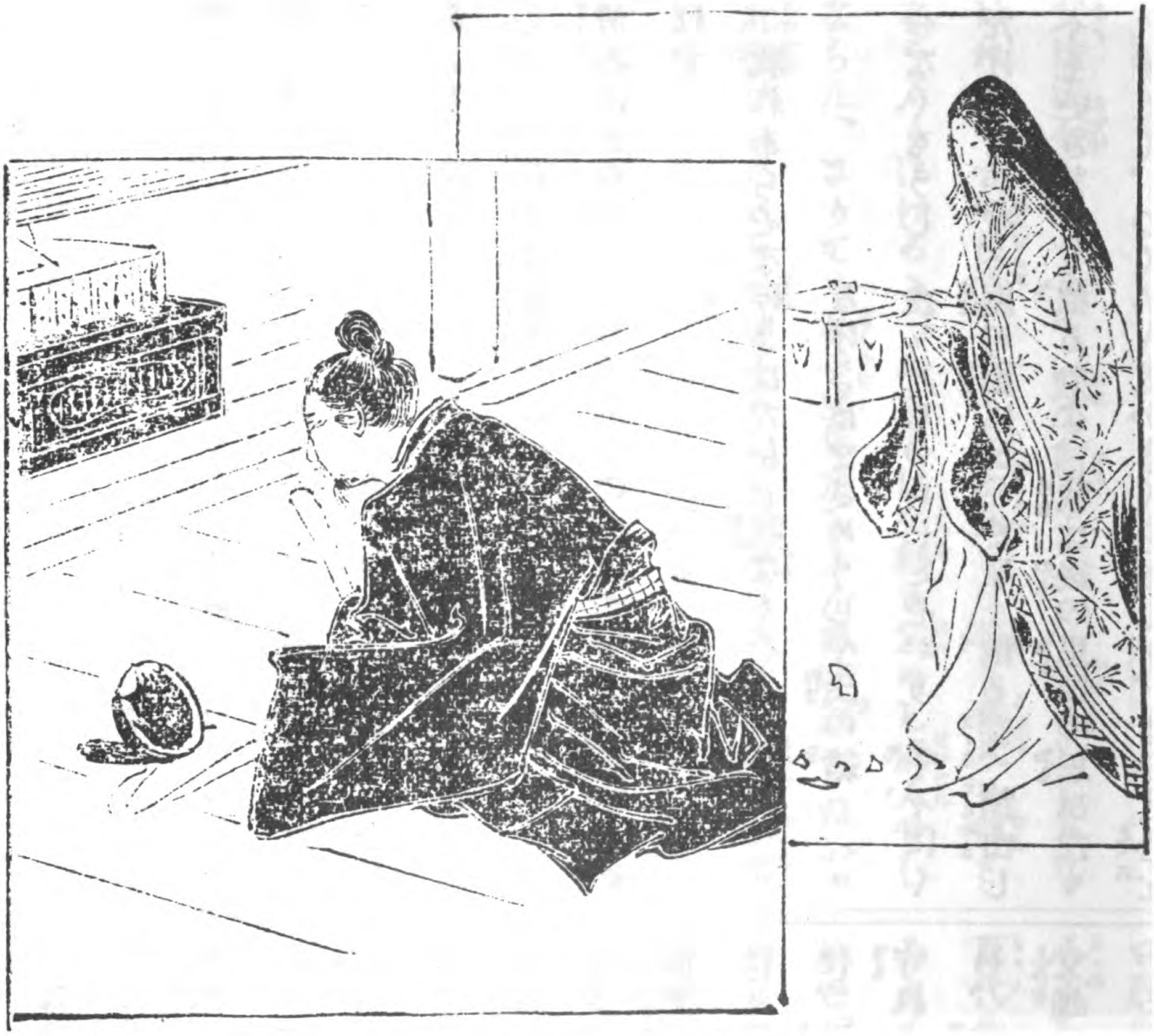
禍を轉じて幸となす、大なるかな頓才、頓智。むかし、奈良の帝の御時、紀の貫之、其の頃はまだ親の手にかゝりてありけるを、やう／＼元服して實定と呼び御内へ召され、御前にて首を傾くるとて、如何にかしけん冠をおとしたり。やんごとなき御前に頭をあらはしたるそそう此の上もなき非禮、如何なる御とがめか下るらんと人々思はず手に／＼汗をにぎり、かたづを飲みて、互みに御氣色をうち守り奉るほぜに、紀氏は動じたる氣色もなく、靜に冠をおしなほして

今よりは紀の貫之と召さるべし
實定ながらかぶりおとせむ

と奏したりしに、叡感なゝめならず、祿さへ玉はりて、いたく興せさせ玉ひけるに、一同かためし掌もゆるみて、感じあひしとなり。

辨内侍の頓才

延元のむかし、後醍醐天皇、みよし野のかり宮におはしましける折、ある夜、御前に、中納言隆資卿、同院の實世卿、宗房卿、その外數多さぶらひ給ひけるに、みき玉はらんとて、辨内侍をして、おんかはらけを待ち出でさせけるに、如何にかしけん、御か



はらけを取れとして、二ひらにわれたれど、玉顔いとあしう見えさせ玉ひけるを、内侍とりあへず。

さかずきのわれてぞ出る雲の上

とくちずさみけるに、帝ればしなほり玉ひて誰れか、之が下の句をつけよといと御心よけに、の玉はせけるに、宗房卿

星の位の光りそへたや

とつゞけければ、帝かへす／＼よろこび玉ひて、いと御心地よく山鳥のなく頃までも御酒まゐり玉ひけりとぞ。

朴平（二十五）

白魚女史

疫疾の流行など申上げしとて、容易く思ひとゞまり玉ふ母様の御心かは、かくせしとて露の間、いつまでもつなぐべき玉の緒にもあらぬを、繋き答へ聞ねんより、我身を捨てゝ、人々のわづらひ早うたゝんものと、百代は幾度か嫗がひまを窺はんとしては、流石にまた人々のおどろきの心にうつりて思ひも切れず

我れあらむなげきはたねじ我なくむ
　なげきはまさめうしや玉の緒

つなぐもうし、たゝんもつらしとむかり、千々にくだけてながむる庭の面には、まなく散る櫻、浦山しくもいさぎよく散るかな、我は後の思ひの思ひたゝれずとて、つくぐ〳〵とかきくらせしが、きつと心をさだめて、散るも天、散らぬも天、何事も天にまかせて命を終らんのみ、朴平、もはや妾は泣かじ、涙は見せじ、早う歸れよ、さてもおそき事や、何處へか行きたる、二日と云ひしを、はや四日の日さへくれんとするに。もしは途中怪我にてもありしにはあらざるかとて、日來はさのみ見ぬ新聞とりひろげ見廻す折りから車の留まる音、此處ぞ〳〵とて入り來る人のけはひ、そや、朴平ぞ、思はず起つて伺ふ玄關先、こは、そも、朴平ならで、思ひがけなや、夢にも思はざりし故郷の父のにはかに來りたるなるに、百代は思はずおどろきて、挨拶も出です、うち守れむ、父は靜に立ち上るに、百代もおどろきを靜め、座敷へ請じ、茶煙草もち出るも、心さわがしく、文雄の留守、朴平のあらぬよしなどたど〳〵しうかたるも胸とゞろきて、我れながらあやしまるゝたか

りなり。

父は流石うなづきて、庭の面をながめ、變るとしもなけれど、十年前立ちよりし面影とは軒も草木も何となうふりにけるよ、かくては文雄も定めし成人せしならん、さりても朴平はまだちよんまげ剃らぬか。此度はこんども思はざりしを、思ひかけぬ用事出來して、かくは上京せしとは、させる用にもあらず、日來たゞ妻をたしなめてうして、氣強う見すれど、さゝいの事にも通知ありし朴平が、しゆびよかりし報なく、今年は文雄が年賀の禮も來ず、殊に妻が、ともすれど都に出ではしうするも、必ず何かかまふる事、文雄のかたくな、何を思ふか、百代のせまき心、何を包むらんなど、流石に心には案じられ、一度上京して、家のさま伺はんなど思ふ心は妻子にもつげず、用事にかこつけて、にはかの旅立も、百代がやつれやうなど、いはねど汲みて、そゞろ思案する親心こそありがたけれ。

百代もそゞろなる心を強ひてすゑて、初めて日來のそゑんを謝し、故郷人の事々尋ねて、なつかしげなれど、文雄と云はるゝ毎にいとゞ、胸さわぐもあはれなり。旅の御つかれ休め玉へなどとて、いぬるを急がするも、百代は、何かの事問はるゝを恐れての事か。翌朝、朝戸出の殊に早かりしも、よべいねず思ひ沈みしと思へどあはれなり。翌日文雄の出先き、朴平は供にたちしにやなど問はれてくるしう、如何に申れかんが都合よかりなんなどそゞろに答へまどふを、父親も大方に推したれど、あながちに問ひも正さず、主人なき宿の、たゞ新聞を話し相手に、裏表相塲まで讀みつくし、煙草を輪にのみくゆらせ居りしが、ふと庭に下りて、花に立ち、柳により、あ

ゆむとすれど、都の庭のおもせむく、せん方なく風呂へと出で行くを見送りて、ほつと太息する百代の心づかひ、返す〳〵もあはれなり。

流石に母とかはりて、涙はもよほさねど、胸とゞろきしげく、一入に朴平の歸りをまちこがるゝくれつ方、朴平歸り來り、盃、椀、料理などの土產とりそへて嫗へとらせなどし、父君がとそのと百代がくむる眼、定めしおどろきもしつらんと思ひの外、それは、思ひがけなき好都合、明日にも迎へまつりて、御祝儀とゝのへんと思ひしを、神の御ひきあはせ、早うもなどいたく笑ひ興じて、やがて座敷にはひ出でゝ、うや〳〵しく挨拶し、此の頃老いの坂路のぼりてか、少しく足なやましかりけるに、若殿が箱根へ入らせ玉ひしをよき折、此世の思ひ出にと思ひ立ちて、しばしの御暇を願ひ、思の外の長湯治に、大殿が御上りをも他處に致しまつりし非禮、何事も寬仁の御心にゆるし玉へ。明日は御主君も早う御着京のつもり、何も〳〵、御話しはその折にゆづるべけれど、相かはらずの御勉學には朴平ほと〳〵困じてなりなど、なほさま〴〵過ぎし事、四方山の事とりそへて、おもしろう語り笑ふに、百代もむねのくるしさを散じられて、とも〴〵に慰め語りて、更深て人々枕につきけり。

旅にもつかれざりしにや、翌朝も朝鳥と共に起きて、萬事心地よげに、百代を笑はせ、朝ぎよめ清らに、髮などそろへなほして、殷勤に客人を伺ひ、今日は誰々の日なりなどとて、庭前の山吹折りとり、佛に手向け、百代にさゝせなどして、殿の歸られぬほどに、しばしの休息をとて、から〳〵と笑ひて部屋にひきこもりぬるにも、いつもの如くしはれたるそぶりは

つゆあらず、折りふしはまた部屋より出でゝ、主君は未だにやなど玄關を窺ひ、客人を伺ひ、晝飯の用意も甲斐〴〵しく思ひろへて、また部屋に入りたりしが、なほ二度三度、立ち出でゝ茶菓さへめづらしきをとゝのへ來りて、心遣ひおつるくまもなし。二時、三とき、けはひ絶えぬと思ふ折りふし、車きしらせて、歸り來る文雄、さても翁が云ふ事誠なりき、さては文雄殿の誠に思ひかへし玉ひてかと思へど、胸とゞろかれて、迎ふるもはづかしきを忍びて立ち迎へ父君がとこは〳〵のぶるに、文雄は例の聞えぬげ、見ぬふりして、座敷に行かんともせず、其まゝ部屋にひき入りたり。さても朴平は何としつる、そやとては、笑み迎ふべきを。

百代またはしたなく、涙さしぐまれながら、父の手前よき程につくろはんとて、座敷へ行けど、父は熟睡の樣子に胸なでゝ、己が部屋に泣き沈み、今こそ死すべき折と、また例のすゞろ心わき出でゝ、短刀懷に佛間に入り、あかしともさんとする手元に、あやしき封書、表に遺書の事、かへし見れど、伊能知家の僕朴平とあるに、おどろきまどひ、そのまゝひつさげて朴平の部屋にあはてゝ走り入れど、はやおくれたり、朴平はかしこまりしまゝ、膝もくづさず、朱にそみて眼も閉ぢ居るに、おどろき悲しみ、屍にとりつきて、朴平、朴平、文雄樣朴平が死に侍りし、父樣、朴平が、おそかりし、〳〵、とどかり泣きまどふ百代の聲に、流石におどろきかけ來る文雄、此のさまを見て、之もおどろき、死屍にとりつきて、泣きしづみて魂魄も消ゑはてしもの丶如し。朴平ゆるしてくれ、妾が殺せしなり。不束なる妾が、なまじひに玉の緒をしみて、年來月來をくるしめ、遂に

此の如きの死を遂げさせし悲しさ。我こそ覺期せしものを、おくれをとりしくやしさやと、泣きまどひ、朴平が腹切りし短刀とり上げて、のんどに貫かんとするを、父親はおどろきて、さゝ腕をしかととりて、そちまでがはやまるな。死して朴平が歸るか、おろかなり、心を靜めよ、決して死してはならぬとて刀をもぎとり、さても朴平、かゝらんと兼ねて推したれば、用に托して上京し、今一旦故郷へつれるなり、はた如何になり、かたらはんものと思ひ來しに、かくはやまりし最期、死なすとも事はすむべきに、かくまでの覺期と知らざりし我のあやまり、おろかさよと涙の眼をしばたゝきて見廻す彼方に、百代がもち來りし遺書のなげあるを拾ひ上げて讀み下すに、

先殿より五十年來一方ならず受け奉りし御高恩、萬分一の御報いも致し奉らず、此度の失策、思へば〳〵口惜しき朴平、必ずいつきつかへよと、數ならぬ身にあまる雖有先殿御夫妻の御遺言、つゆおろそかにし奉る心は候はねど、此度の大失策、先君よりの御言葉を反古に致し、いやしき色にけがしまゐらしたる朴平の罪、死しても先殿へあはし奉る面のあらぬ悲しさ。若殿、どうぞ、おろかなる朴平が最期をあはれみ給ひて、もとの野中の一つ心にかへり、親御前よりのやんごとなきゆかり、深う固め給ひし、御素志、あくまで遂げ給ふやう偏に〳〵、希ひ奉る。さらでは朴平が魂魄おかん土も覺えず候。

また、日來、たゞ姫百合のうき事も知らせ給はざりし百代樣、老いの心のせくまゝに、おろかにもとり急ぎ、思ひがけなき憂きをかけ奉りしおろかさ御兩親へ對し奉り、御わび事も御坐なく候へ





ど、つらかれとてせし事には候はず、何も〳〵至らぬ心故とおぼしゆるし給ひてよ。はや七十路の老翁、さらでも朽ちん骨、必ず百代様、やさしき御心にをしみて給はるな、勿体なく候。さても〳〵さゝかりに、つゝしみ深う、よく〳〵やさしき色に生ひたち給ひし君を、一日も奥様とかしづかざりしくやしさ、之のみが、〳〵、朴平の恨み、今生の恨みに候

とぞかきよみ終りて、流石に父も涙にむせべど、文雄も今更に不覺の涙にかきくれて前後も知らず、百代はなほ更、生体なくなきゐてがるゝ、ふすまあけて入り來りしは春野輿風、箱根より出せしか、朴平の書狀に、百代のゆかり、小千代の事、文雄が此頃の心などくはしくしるし、さて已れの覺期の事、後の事たのみ參らするは、君より他にはなど細々としるしありしを讀みておどろき、人事なれどすぐに上京して、新橋より車をとばし、まづ文雄の家に立ちよりて案内請しかど、さわがしさに聞えざるに、日來心よき家、づか〳〵と上りて伺へば、思ひきや朴平の最期、聞くより悲しく、そゞろに涙にくれて言葉もなかりけるが、流石快活なる輿風、涙を拂ひて、翁よ、ゆるせよかし、ゆかり、ゐにしなどある事とも知らず、度々諍ひ出せし僕が罪、わびるも今更に甲斐なし。やよ文雄君、げに忠僕の目出度き最期、いつまでをしむべき事かは、早う魂魄をやすめやらんに若かず、百代の君とやら、ちと屍をはなれ玉へ、文雄君、その君は力なげなり、君抱きてのけ玉へ、机、机、机はどれにする、文雄君、君が常に用ゐらるゝがよけんなど輿風のさしづに、百代の父も涙をしだゝき、誠にさなり、百代、何と云ふ事ぞ、早う

机をもち來らずやと叱りはげますほどに、與風は朴平の屍を横になし、翁や、翁や、もう横になれ、長く臥せ、魂魄も殘すな、與風に云ひこせし事、よく〳〵聞ゐて此處へ今來たり、案じなせそとて、屍をなでゝ、はら〳〵とおつる涙を頬にふり注ぐに、文雄もゐ堪へず、朴平が短刀とり上ぐるを、與風おわてゝ取つて、文雄君、君は大事業を忘れ玉ひしか。名を立て、朴平が魂魄をまつらんとは思ひ玉はぬか、口惜しき男にはなられけるよと罵るも友の心情とおはれなり。

○　○　○　○　○

朴平が一死に、文雄の迷ひの夢をさまし、百代と契りむつましく、家長久に榮ゐけるも、忠僕の誠心のいたす所と人々感じあへりける、

（をはり）



文林

晴後遠望　　近衛忠熙

雨はれて志ろく見ゆるは足ひきの
とほやまもとの水のひとすぢ

河邊螢　　東久世通禧

草ふかき里の小かはのいさゝみつ
よるは螢のよるせなりけり

夏花　　鍋島直大

梅雨のはれたる庭に出て見れど
くりの花とそちりみたれけれ

夏露　　高崎正風

朝ゆふの露のめくみはみなつきの

てる日によれし草そしるらん

遠村蚊遣火　壬生基修

かやり火の烟かすかになりにけり
月になりゆくやまもとのさと

螢　本居豊穎

水にそひ風になかれてとふほたる
消えぬやふかき思ひなるらん

全

れもひくさつひに螢と身をかへて
後さへくちすもえわたるらむ

時鳥稀　池田政禮

夏木たち志げるわたりに休らひて
まてとも鳴かぬほとゝきす哉

時鳥過　長谷信成

玉くしげ二こゑ三こゑなきすてゝ
よそに過ゆくほとゝきすかな

木曾義仲　宮地巖夫

たけき名をとゝろかしたる武士も
あはれ粟津のつゆときえけり

時鳥一聲　北郷久政

時鳥なくひとこゑはみつ枝さす
もりのわかはのいつこなる蘭

閑庭夏草　遠山英一

よもきふの庭のなつ草志けりあひて
石も小まつもうつもれにけり

流水窓近　小出粲

東のやまをつくゑのうへに見て
窓にはきよき加茂かはのみつ

全　西三條實義

ふみまなふ窓のしたゆく川みつに
うき世のちりを洗ひなかしつ

鵜川　諏訪忠元

ぬはたまのやみをよしとて吉野川
　鵜舟のかゝりかすそひぬらん

大宮の螢見にまかりてよめる中に　大畑弘國

みぬまかは螢のかけはかききえてよめる中に
　折めつらしくなくほとゝきす

雨すきし松のこすゑのみとりさへ
　なかれてすゝし大宮のさと

仝　和田正雅

みぬま川ほたるのかけも水の上に
　聲なかれゆくやまほとゝきす

瞿麥露　三輪義方

なてしこのさける籬のあさしめり
　けしきはかりにれけるつゆ哉

水透螢　草野隆道

かきりなくもゆる螢のかけ見えて
　難波ほり江はゆふやみもなし

蚊遣火　足立正枝

かやりたく烟りなからに山もとの
　賤かのきはくれそめにけり

女鑑　菊池眞澄

女かゝみ手にとりてみん影うつる
　いにしへ今のひとのまこゝろ

淳和天皇の皇后
正子内親王　佐々豊水

さかの山たかき木末のしたつゆに
　天なかくまける四方の民草

吉岡宗猷妻　仝

鶴崎の城上にたかくかゝやきぬ

君かみさをのきよきかゝみは

山家泉　伊東祐賢

やまかけの岩間もれくる水の音を
むすふいほりは夏なかりけり

仝　熊谷行

なよ竹のなひくまに／＼飛ふ螢
なに思ひてか身をこかすらん

つれ／＼なるもの　安齋篤敬

世をさけて柴のいほりにすむ人も
長き春日はいかにかあるらむ

さゝにくきもの　木庭芳香

少子かまたとゝのはぬつまことを
はこり顔にもかきならしつゝ

雨後新樹　近衞貞子

むらさめのはれたるにはのわか楓
水のまたゝるこゝちこそすれ

船納涼　蜂須賀随子

暮はてゝつきもすみたの川ふねに
まはならねとも秋かせそふく

夏雲　前田朗子

遥かなる山かと見しはなつの日の
空のくせなる雲にそありける

岸上藤　西四辻茂子

かけ高きまつを波こすこゝちして
岸ねのふちのはなさきにけり

朝梅雨　小池道子

梅雨のそらくらけれはみしか夜も
あけかた遅くれもはるゝかな

夏河　保科節子

河みつのなかれにうつるなつ虫の

かけみるうちに夜はあけに鳬

湖夏月　原田蒼生子

凉み船こゝろしてこけわしの海に
うつれる月のかけやくたけん

月前瞿麥　高崎竹子

雲間もるつきのひかりに露見ねて
ゆかしさまさるなてしこの花

夏井　常盤井文子

くるま井の音こそたねす聞ゆなれ
あつさをしのく人やくむらん

梅雨　河村重子

くす玉のをさへしめりてたれこめし
軒端いふせきさみたれのころ

師の君高崎正風大人より扇子をたまはりたるをかたしけなみてよめる

遠山いね子

しきしまの道のみわやに末ひろの
かなめをけふはゆるされに鳬

夕納凉　中島歌子

かはほりのとふ夕暮になりにけり
友をやとはんすゝみかてらに

野夕立　鶴久子

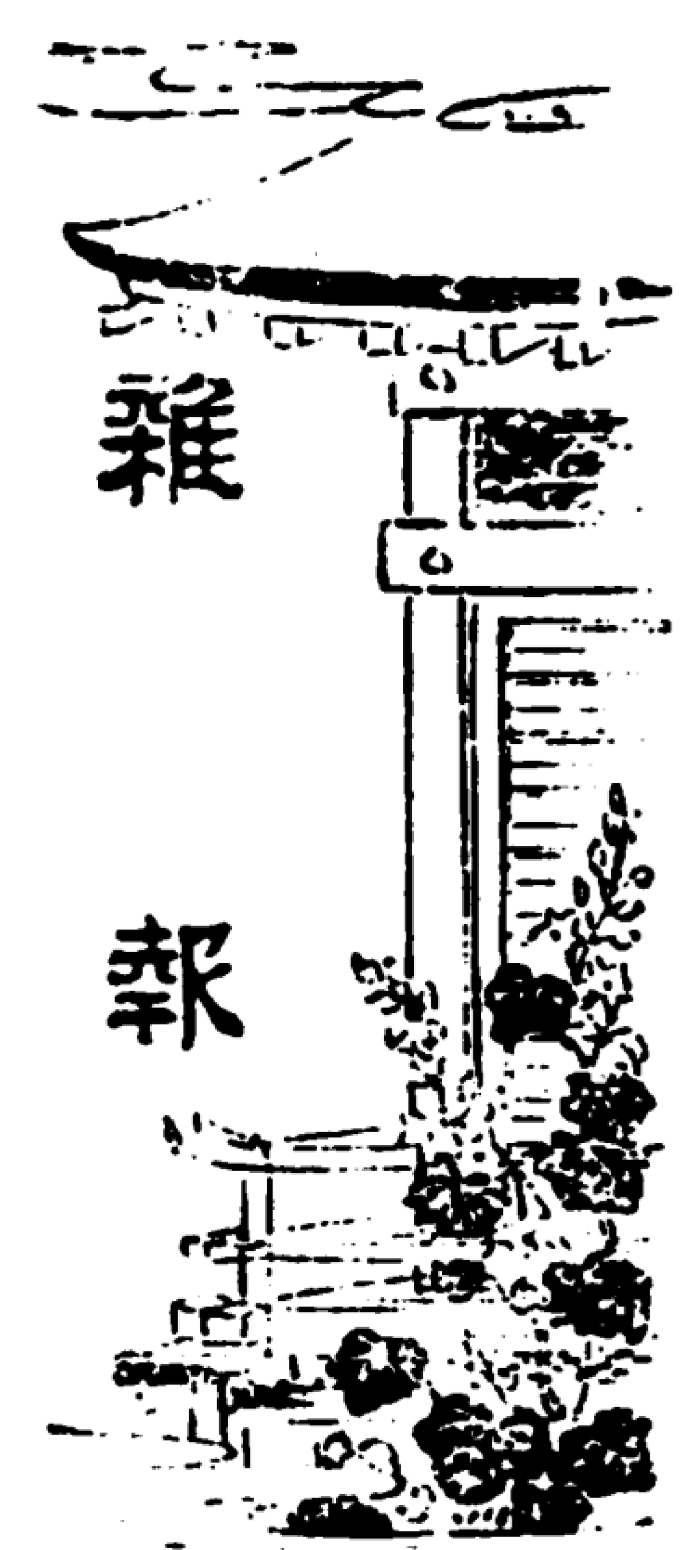
なつ衣ぬれとはりけりかけもなき
野中にかゝるゆふたちのあめ

雨中郭公　安東菊子

ほとゝきす雨のふるひの音つれは
はつこゑよりも嬉しかりけり

螢　仝

ぬは玉のやみを照してかへるさを
みちひきかはにとふはたる哉



●英照皇太后御遺物の蠶種　英照皇太后の世にれはしまし丶ほどは、常に大御心を蠶飼の事に止められ、畏こくも親ら御手を下し給ひて、御つきの方々をもはげまし給ひしよしは承り及ひし處なるが、崩御の後、御遺物の蠶卵紙及飼蠶の機具等は、皆舊非藏人上加茂村の鴨脚光長といふ人へ下し給ひたるよし、蠶種は又昔と稱する良種にして、鴨脚氏はいと忝けなみて心を盡し養ひたるに、結果頗る好良にして、此の程収獲したる繭をは　兩陛下の叡覧に供し奉りたるに、殊の外その良好なるを嘉し給ひ、倘製糸すべき旨仰付られたるを以て、鴨脚氏はこれを京都製糸會社に命じて採製せしめたるよしなるが、兩陛下には此の糸にてハンカチーフを製織せしめ給ふ御思召なりと承る。

●英國女皇の御禮電　去月二十二日、英國女皇の即位六十年祝賀式に　我皇室より御名代として有栖川宮殿下を參列せしめられたることは、前記の本紙に記載したるが、女皇より　天皇皇后兩陛下へ左の如く御禮電ありたり。

朕は貴皇帝陛下並に貴皇后陛下の有栖川宮殿下を御名代として朕の即位六十年祝賀式に參列せしめられたるを感謝且つ殿下に依て甚だ美麗なる品を寄贈せられたる厚情に對し爰に誠意を表す

●新高山　新領地臺灣のモリソン山はその高さ一萬三千九百六十七尺にして、富士山よりも高きこと一千五百六十尺の高山なるが、さきに乃木總督此の

事上奏に及ひし處、今回同山に新高山の名稱を下し給はるべき御沙汰ありたりといふ。

●南朝の忠臣足助公の碑　三州東加茂郡の有志者が、南朝の忠臣贈正四位足助次郎公の碑を、足助町に建設せん企をなし居る由なるが、該碑石は仙臺石にて丈け一丈餘あり、撰文は品川子爵、書は衣笠豪谷翁にて、目下岡崎の石匠嶺田某の工場にて彫刻中なりとぞ。

●烈婦の行狀

細川侯の家老職たりし米田家に仕へし中山宗俊覺書より烈婦の行狀二節を抄出して、今世婦女の龜鑑にとこゝにしるす。

肥後　佐々豊水

○第一節

明智日向守殿謀反ノ刻、忠興様御前様同玉様ど云ふ、丹後國山中ニ御迯リ被遊候儀ハ、天正十年夏、信長公、信忠公、御父子様御上洛、忠興様備中國高松城御加勢トシテ御出勢成サル筈ニテ、御用意調候上、信長公御父子様御上洛ト聞召サレ、米田壹岐守求政ハ、佐久間甚九郎勘氣御許シアリテ、今度信長公ヘ可爲御供旨求政ヘ御密用被仰付、五月末丹後ヨリ上洛仕、求政ガ京今出川相國寺門前ノ屋敷着仕候處、六月二日ノ大騒動ナリ。早田道鬼齋ト云武功ノ牢人ヲ育置キ、是モ同道ニテ相登リ候道鬼齋ハ上方ニモ無隱大達者ナルモノナリ。信長公御父子様御自害ノ時、丹後ヘノ注進ニ則道鬼齋ヲ申付差下シ候、十六里ノ道ヲ三時餘リニ馳付候、藤孝様御父子様、御前ニハ米田助右衛門是政御用ニ罷出居申候、此注進ヲ被聞召、御父子御暫時無御言葉御愁泣限リナキ御様子ニ候、良久シクシテ、忠

與様被仰候ハヽ、如此ナル惡逆無道不仁者ニ縁ヲ組ミ、天下ノ人ノ舌頭ニカヽル事無是非被思召候ヨシ、御述懐至極被遊候、是政モ共ニ忙然タリ。是政申上候ハヽ、光秀ノ惡逆無道前以テ知察スベキ様ナシ、光秀ノ常有時ノ御縁結ナレバ無力事ニテ候、自己ノ道ヲ守ルヨリ外ニ無他儀ト申候、忠興様御意ニハ、不仁者ノ子ナレバ内室ニハ難成候、然共日本ニ身ヲ可擄所モナシ獨身者ナリ。如何可被成哉ト御意ナリ。是政申上候ハヽ、私妻ハ光秀妻女（父ハ妻木勘左衛門ト云光秀妻ハ天正七年六月十四日於坂本自害四十八歳）ノ妹ナリ、藤孝様御夫婦様御中立ニテ嫁申候、私以テ御同意ニテ候、先私領内山谷中三戸邊ニ有徳ナル山伏アリ、功者ノモノニテ候、此ノ山伏宅ニ暫ク蟄居可然ト申上ル、藤孝様モ可然ト被仰、此儀ニ決定シ、河喜多五郎右衛門（彼石見明智家ヨリ尚從候與ノ守ナリ）、其外一兩輩是政ガ妻女、並ニ是政ガ家老木崎大炊助夫婦、小川掃六（小川掃六ト云ハ是政ガ妻女ノ親類ナリ）（又木崎大炊助死後ニ其ノ妻女ハ山姥ノ名ヲ得タル奇女ナリ）等御付ケ山中ニ被送、山伏宅ニ御蟄居ナリ其後秀吉公ノ命ニヨリテ再會前ノ如ク御成候。慶長五年、石田三成謀反ノ時關東勢ノ諸將ノ妻女ヲ大坂城中ニ取込ミ申由ニ付、忠興様御留守ヲマモル者共ノウチ、小笠原少齋御前様ヘ御除キ被成候ヘ御供可仕旨申上候ヘバ付テ無御承引、亡父天魔ノ所爲ニヤ、不思儀ニ天下ニ惡名ヲ殘シ候事無是非候コトナリ。我女ナガラ可死期をのがレ落人トナリ、忠興様ヘ對面スベキ様ナシ、少齋介錯仕レ、石見死體ヲ隱シ家ニ火ヲカケヨトノ御意ナリ。石見御尤至極死出三途ノ御供可仕ト申上候其時是政ガ妻女ノ妹ニ霜ト申婦人附居候、此女ハ江州和爾城主、入江兵衛尉ト申者ノ妻女ナリ、兵衛尉ハ山崎合戰ニ討死シ、後家トナ

り、由緒ヲ以テ今ハ御前樣ノ内ニ參リ居申候、其儘死用意ヲシテ罷出候處ニ、御前樣被仰候ハ此有樣ヲ誰カ忠興樣其外子供ヘ傳ヘ聞カセ可申者モナク候、現世後世マデノ厚恩ニ思召候間此遺書夫々ノ形見忠興樣其外與一郎、與五郎、光千代丸無事ニ歸陣ノ上ツブサニ傳ヘ候ヘ如何バカリ安堵ニテ可有之候ト偏ニ賴ミ思召ノ由ニテ、無是非御形見ノ品々御遺書ヲ請取リ、婢女ノ形ニカヘ忍ビ出デ、ヤガテ御歸陣ノ上御遺戒ノ如ク申上ケ屆ケ候、天下ニ貞女ノ御名ヲ殘サレ、香シキ威名ヲ止メラレタルナリト承ル。

○第二節

長岡肥後忠直於豐前國馬嶽岩石城誅戮被仰付候、父飯河豐前宗祐ヲモ慶長十一年七月二十七日同日ニ御討果被成候罪科ノ譯ハ難知事ト承候、肥後方ヘハ討手絲川藏人豐前方ヘハ討手河喜多石見被仰付候、肥後妻女方米田助右衛門是政ガ嫡女ニテ候、夫婦三年義絶ニテ表向無對面候四五歲ノ娘一人アリ。名ヲ阿伊ト云ふ、此時是政ガ後室ヲバ雲仙庵ト申候。忠興樣御城ヘ召サセラレ。豐前父子御討果被成候、其方娘ハ無罰候、肥後ガ子ハ女子ナリ、親子共ニ其方ヨリ申遣シ呼ビ取リ養育仕候ヘト被成御意候、雲仙庵忝ク存候ヘトモ、私心ニシテ存ジ合ヒ見申候ニ常々無挨拶ノ男ヲ捨テ一命助リ可申トハ申間敷候、私ヨリ申遣シ候テ同心不仕時ハ私ヲ見限リ、死後ノ障リニ成リ可申候、サレトモ不便ニハ存候間、御ハカラヒヲ以テ一命助リ申候ヘバ無此上存候間如何樣ニモ御ハカラヒ成サレ下サレ候ヘト申上候ヘ共米田與右衛門是門（是政弟也）ヲ召サセラレ候テ、肥後ガ妻女並

ニ娘ハ殊ニ幼年無罪者共ニ候ト我等申候ト申遣シ呼ビ取候テ雲仙庵ニ渡シ養育サセヨト御意ニ付、是門方ヨリクハシク申遣候ヘバ肥後ガ返事ニ忝ク奉存候、私儀ハ覺悟仕居申候、無罪御意ヲ承リ快ク果テ可申候娘阿伊事は東西不存者ニ候、雲仙庵へ御渡被下候ヘト返事に娘を付て出し申候、雲仙庵養育ニテ十歳内外ニテ病死セリ、肥後方ヨリハ妻女へ使ニテ年來無音不及是非候、早々雲仙庵ニ參リ娘ヲ養育シテ給リ候ヘトノ儀ナリ、妻女ヨリノ返答ニハ左樣ナル御事ニハ候ヘドモ御同前ニ覺悟仕居申候、娘儀ハ幾重ニモ奉頼、無罪ニシテ相果申儀無此上悦ト存候、早々奧ニ通リ、我等死骸ヲ片付ケ心靜ニ生害仕ラレ可然旨ヲ被申候時ニ肥後ハ奧ヘ通リ、三年ブリニ對面有之候、妻女、行水仕舞ヒ髮ヲサバキ白装束ニテ越方ノ事共申盡シ、門出ニ拵置候トテ、白キ湯カタ白キ鉢巻白キ手スキ白キ帶ヲ廣蓋ニ乘セ出シ、早ク我身ヲ被片付候ヘトノ儀ニテ肥後ガ手ニ掛リ被申候遺骸ヲ隱シ置キ肥後ハ右ノ装束ニテ出テ藏人ニ逢ヒ被申。生害仕ラレ候ヨシ承ル。

因曰　從三位細川忠興卿の夫人は、明智光秀の三女なる。長岡肥後忠直が妻女は、光秀の内室妻木氏の妹を米田是政が妻として出生せし嫡女なり二節ともに明智家にゆかりある貞烈の婦人なり。あはれ、明智家とて見すつることなかれ。女の鑑は天下に赫然なり。明治三十年七月の七夕祭に敢子の婦女に直會の式終てかくはしるしぬ。



此度は記事輻湊につき附錄（陰當帶）を添へず



敎の庭

七月廿日兼題　遠村白雨

天　備前國和氣郡伊里村閑谷　西　艶子

涼しさをよそに見よとか徒らに
とはむら里をすぐるゆふだち

地　廣島市稻荷町　香川　顯子

まち渡る雲には今日もつれなくて
むかひの里にゆふだちのふる

人　甲斐甲府山田町　名取正代子

遠里はゆふだちすらしかせさわぎ
雲のけしきのたゝならぬ見ゆ

秀逸（十首）

うちわたすをちの村里かきくもり
見る目涼しくゆふだちのふる　美奈井芳子

遠かたの山こすくもと見るほどに
一むらすくるゆだちのあめ　木川里子

雲きほふとほちのむらの夕だちに
雨見ぬさともすゞしかりけり　三浦時子

夕立のふりくと見しかかたかへて
かきくらし行く遠のむらさと　江口とみの子

しらけふりたちしはなにぞ夕立か
海人の子さわぐなまむきの里　綿野りき子

をちかたのさとをすきゆく夕立に
わがすむいほも涼しかりけり　住山幾子

大そらの雲のたえまは見えながら
ゆふ立はげしをちのむらさと　廣田とめ子

けふもまたけしきのみにて遠方の
さとをすぎゆく夕だちのあめ　林　久子

なるかみのおとちかつきぬ白雨は
をちのむらをや今すきぬらん　仁保志麿子

朝な夕なめにいるをちのしはやまも
ありとはみえぬ夕だちのそら　矢島えい子

（以下原稿到着順）

ゆふたちのくもの中にやかくれけん
　いままて見えしをちのさとむら　永井さい子

さほ里へ行きにしひとやぬれつらん
　かなたのもりを過ぐるゆふたち　富士村幾子

いかつちの音もはるかにきこえつつ
　ゆふたちすなりをちのむらさと　田代あや子

けふもまたゆふたちすらし見渡せは
　をちむらさとにくもそかゝれる　田代艶子

風さわき見る〳〵くものかゝりけり
　ゆふたちすらしやまもとのさと　坂田きみ子

見るかうちに遠間のくもはきほひきて
　ゆふだちすなりたひわけのさと　中澤ちの子

我か家のかやりの烟かけかつ消えて
　ゆふたちすなりをちのむらさと　春永幾志子

をちかたにかさなる雲の見えそめて
　よそめすゝしくゆふたちそふる　栗生喜久子

けしきたつ峰のあなたのくろくもは
　さはれぬさとのあめとふるらん　田中ゑん子

しらかははうすにごりせり雲かゝる
　あすのやまさとゆふたちすらん　佐々小琴子

すゝしやと立ちよる里はかつはれて
　ゆふたちきほふおくのやまもと　佐々有鄰子

立ちのほる煙かけふりさかつ見えて
　遠方にふりゆくゆふたちのあめ　杉浦よし子

夕たちのふるさと見ることうれしけれ
　我かさとちかきみれにあらねど　伊藤きよ子

たかさとにゆふ立すらんひとむらの
　くもたちさわくをちかたのそら　近藤ふく子

をち方はゆふたちすらしすさましく
　のすゑのうらにさわくうきくも　稲原蓮子

うちわたす遠むらさとにくものみれ
　つくると見れはゆふたちのふる　酒井美佐子

そよとたに風なきころはとほやまの
　さとのゆふたちすゝしかりけり　榊原八千代子

黒くものけむりたちそふさまみれは
　とほきさとにはゆふたちやする　生熊つれ子

にわかにも涼しきかせのきほひきて
　ゆふたちかゝるをちのひとむら　北村孝子

いつくにかあめはふりけんゆふ立の
　けしきのみしてかせのすゝしき　北村左枝子

を草かるをちのむらひとさわくらん
　やかてそかゝるゆふたちのあめ　北村てい子

里とほくけぶり立ちしさみしほとに
　かみさへなりて降れるゆふたち　西元さし子

久かたのくもにいりひのかげろひて
　のすゑのさとにかゝるゆふたち　高田さと子

さと遠み下りたつみれのゆふたちと
　見ゆるはやがて雨にかあるらむ　高田せむ子

なる神のおとはるかなるゆふたちの
　よそめすゞしく見ゆるやまさと　東野さく子

とほむらは雨やふるらしくも見ゐて
　あをはふきくるかぜのすゞしき　和田八重子

わたし守やよいそがすやをちかたは
　いかづちなりてゆふたちのする　澤田雄鶴子

みるうちにゆふたちさわくをちの山
　さゞろくおとにおとろかされて　近藤こと子

いつしかさこゝにはれてをち方の
　ささにふりゆくゆふたちのあめ　土肥仙子

をちかたの夕たちすらし山のはに
　かゝれるくものたちさわく見ゆ　高島蕊子

なる神のをとすさましくさきのまに
　くもこそおほへをちのむらさと　石川頼子

暗のまにゆふたちさほくなるかみの
　いつれのさとにいまやふるらむ　石川樂子

ゆふ立のいまやふるらむかきくらし
　をちのむらさと見ゐわかぬなり　石川久子

ゆふたちはいつこなるらんかの里と
　きくにはとほきなるかみのおと　吉村ふて子

とほ里はあるかなきかにわかぬまて
　くもにきほひてあめさわくらし　玉井陸子

けふりかとうたかはれぬるあまくもに
　みゐすなりゆくをちのむら〳〵　羽田三緒子

山たかきをちのむらさとあめならん
　しろくかゝれるみれのうきくも　岡田いし子

みわたせはくもたちまよひ遠さとに
　ふるゆふたちのあめそすゞしき　右田藤子

立ちのほるけふりとみゐて遠かたの
　ささかきくもりゆふだちぞふる　徳永萬壽子

をちかたのゆふたちくもをみわたせは
　ふらぬこなたもすゞしかりけり　秋野小萩子

うちわたす遠はくもゐと見るうちに
　ひとむらしろくゆふたちのふる　廣田しも子

なる神のおともかすかにきこゆなり
　遠のむらさとゆふたちやふる　野木つれ子

さきのまにゆふ立すきてふきおくる
　かせもすゞしきとほやまのさと　佐山靜子

なる神のひゞきもすゞしをちかたの
　さとかきくらすゆふたちのあめ　東野けい子

かみなりの聲もかすかにきこゆつゝ
　とほむらのみになれるゆふたち　安井うめ子

牛の背も越ゐすといふもうべならん
　とほむらのみはゆふたちのする　小野田八重子

いち人のさわくさまさへほの見えて
行く手のさとにゆふたちのふる　林つる千

ゆふだちのふる江の里や過ぐるらむ
はるかにひゞくなるかみのおと　田部里子

みわたせは遠むらさとのやまのはに
けむりとみえてゆふたちのふる　武政常盤子

ゆふたちのいまや降るらん村くもに
くもりはてたるをちのひとむら　重松たか子

ときの間にめくりめくりて見渡しの
とほやまもとはゆふたちそする　弘田ゆき子

とほむらはゆふたちならし見渡せは
いこまの山のくもかくれゆく　水上仲子

をちの山見るまにくものおほへるは
ふもとのむらにゆふたちやする　水上千代子

見るうちに風もきほひてとほやまの
ひとむらさとにゆふたちそする　水上なを子

こなたにもやかてふるらんゆふ立の
くもにかくるゝをちのひとむら　日吉あさ子

うきくもはふしの高嶺をはなれけり
ゆふたちすらしよしはらのさと　梨本信子

にはかにもすゝしくなりぬうち渡す
をちのむら〳〵ゆふたちのして　穂積稔千

たへかたきひるのあつさも忘れけり　佐藤喜代子

とほむらさとにあめやふりけん

とほさとのかまどのけふり末きえて
かすむやあめのふれるなるらむ　肝付滋子

ゆふたちの雲のけふりをたちこめて
みる〳〵きゆるをちのむら〳〵　下元茂登子

見るかうちにわかにはすきて夕立の
あめふりそゝくをちのやまさと　宇高まつ子

ゆふたちの雨のあしとくかゝりけり
いまわかいてしをちのむらさと　上原能夫子

こゝもとも吹くかせ涼しかなたなる
むらさといまやゆふたちのふる　上野君子

なる神もこゝはをとにてはれにけり
ゆふたちすらしとほのやまさと　宮地琴子

時のまにをちのむらさとくもきほひ
よそめすゞしくゆふたちのふる　近藤好子

日のかけはたかれに見せてゆふ立の
あめにくれゆくとほのひとむら　白井梅子

夕たちのはれにしのちはをちかたの
ふらぬさとまてすゝしかりけり　石崎まさ子

をち方はゆふたちすらしあかねさす
日はてりなからかせのすゝしき　林常子

みなかみはゆふたちすらしさと川の
みかさまさりてさゝなみの立つ　近森のぶ子

ゆふひかげ高嶺のまつにみゆながら
やまもとくらくゆふたちのふる　高田きよ子

夕日かげかなたのみねにかゝれるを
ふもとのささはゆふたちのふる　竹内まさ子

をち方のみねはてるひのはゆながら
ふもとのささにゆふたちのふる　降田槇子

わが里はひかげさしつゝみわたせば
ゆふたちすなりをちのむら〳〵　小森さた子

水上のささにかゝりしゆふたちを
いさゝをがはのにごりにぞ知る　植木鋼子

くもりつゝふるかさ見れば雲行きて
いまさほむらにふゆたちぞふる　森山英子

如何斗りすゞしかるらんゆふたちの
くもにかくれしをちのひさむら　下村さた子

此の里はさくはれゆきてうきくもの
うきたつかたにゆふたちぞする　大渓しげ子

遠やまはくもにかくれていりひさす
ふもとのむらにゆふたちぞふる　矢野うめ子

ふく風もにはかにすゞしゆふたちの
くもかぜおくるをちかたのささ　宇多田楊子

土さくるあつききさかりはさほささを
降るゆふたちもすゞしかりけり　野中あさ子

なる神のをさをのこしてゆふたちは
やまささほくふりわたりゆく　久松せい子

あま雲のかゝるやゝかてゆふたちの
あめに消ゆくさほのひさむら　日高かす子

なるかみのおさはの山はくもはれて
ゆふたちすらしさほのむらささ　岩本さく子

賤のめがいそくいへちにしられけり
ゆふたちふりぬさほむらのそら　伊東美代子

さきの間にあまつ御空もかきくもり
さほやまささにゆふたちのふる　植木さよ子

ゆふたちの雨はいつこに降りぬらん
たちまちにごるささがはのみつ　石川すけ子

この里ははや降りすぎてゆふたちの
さほのをむらにいまかゝりけり　植木花子

神なるさおもへばにごるささがはの
をちのかたにやゆふたちの降る　石川さく子

村くものたつかさみればほさもなく
さほやまささはゆふたちぞする　萩原章子

七月廿日兼題　池蓮

天　筑前嘉穂郡飯塚町　林久子

つねならず、ひまもる風の打薫れるに、朝いの夢をや

ふられて、ねやの戸おしあくれば、まち〳〵し池の蓮の、三つよつ咲き出てたるなりけり。其なかに、一きは大きやかなるうす紅の花の見えたるは、去年、友のもとよりもらひきて、植ゑつるにて、いとめでたければ、一しほ庭のおもぶきをそへし心地のせられて、ひとりゑみつゝ、庭におり立てば、清き花の香を吹くる風、たもとにかよひて、心さへすが〳〵しうなりぬるもうれしや。

地　福岡縣筑紫郡警固村　吉村ふて子

夕ぐれのすゞしさにもよほされて、とひきつる友とはしちかうものがたりしつゝあるに、さとふきくる風のえならぬ香に匂ふは、ちかきあたりの池の蓮なるべし。花のけしきいかならむと、ともゆかしかれば、うちつれてみにゆきぬ。水の面を覆ひて、廣葉のあふぎあふさま、うすくれなゐの花のくちびるさゝやきあふやうなるも、たとへんに物なし、むかひ見るこゝち、ひるのあつさも、物學びのつかれも、わすれはて、いとたのし。

人　肥後國菊地郡城北村　佐々有鄰子

爲尹卿の千首歌に「池水に葉ふしの鮒やみたるらん、蓮のうき葉のゆるぎたちぬる」とあるがごとく、妾が遠祖の島このみのくせに、はるかの山より水せきかけ、庭をさながら湖のやうにつくりなして、栖野の池と名づけられしが、水底には鮒踊り、泥土よりは紅白の蓮生ひたちて、朝は露にほひ、夕は風にかをり、うき葉も卷葉も、波のうねうねゆるぎそよぎてうのさまのかの歌のさまに似かよひたれば、今年はことさらすき人達をつどへて歌をよみ、茶を煎る莚に一莖二莖手折來て、床の小かめにさしつるに、さとかをれる花のにほひもいはずうれしうてなん。

（以下原稿到着順）

中澤千野子

さる池の蓮の咲きそめしときゝつれば、いつかはと心に掛けつれど障ることのありて、え行かざりしを、うつろはゞいかに口惜しからんに、今朝はとまだきに起き出でて、露ふかき千草ふみ分け、いな葉を渡る朝風に袂はらませて、ひとり細きあぜ道をたどりゆきぬ。池はいと小さけれど、さすがに趣きあり、今日を盛りと咲きそろひたる花の、さながら白妙の雪かとあやまたれ、葉毎にたまく露の、白玉とまごふなど、見るから此の世のものともおぼえず、心地もいとゞすゞ

やがにて、

白妙の雪かさまこふ花はちす
風さへさむきこゝちこそすれ

にごりゐのにごりに染まぬ蓮葉は
人の心のかゞみなりけり

なぞそゞろこといひ出てゝ、めかれもせすながめ居しに、日もいさたけぬれば、のこりをしうも、かへり見がちに家路につきぬ。

木川里子

なかしくせき入れし庭の池水に、やどるへきくまもなきまで咲きみちて、玉とあざむく白露を、うき葉にかざし、夕風のかよふたびにさらさらとこぼれて、蓮の上にちりみだれ、おのづからにかをり來るげはひの涼しさは、堪へがたかりしひるのあつさもわすられて、此世のうちとしもおもはれず、蓮の花のさかりのすがすがしさ、たぐうかたなし、淤泥より出てて濁にしまぬ清き色香を愛て、唐土のなにがしが、花のうちの君子といひけんも、實にさることにて、浮世のちりもしばし拂へるここちせられてなん。

田代艶子

朝日のかげのさしそめぬ間にこそ見ごころはあめれと、あさとく起き出て、はちすに名を得たる、ほどちかき池にものしけるに、所せきまで生ひにたるが、うすくこくさき匂ひて、花毎にいさましう、朝日まちがほなるもらうたし、みどりも深き浮葉の上には、露の白玉をかざして、なり〳〵風にみだるゝも、はゐある心地す、あはれかゝる所に身をおきて、にごりにしまぬ花はちすの、きよきを己が友ともなしなば、いかにめでたからましと思ふにも、そゞろ此世の外の淨さも思ひたゝされてなん。

稲原菫子

夜の間の暑さ拂はんと、朝まだきより、ふしどをいでゝ、そこはかとなく庭をへめぐり、例の蓮池ちかく、さまよひ來りぬ、有明の月は、まだ其面にやどりて、星の如くきらめける、花葉の白露、目もさむる許りにすが〳〵し、時々朝風にもれくる涼しき香は、裳にうつるほひて、心地爽やかに跳はれ、先の暑もいつしか忘れはてぬ。かばかり濁りたる池に生ひながらも、倚、其心にそまざる、蓮の花こそ、中々に、清く、ゆかしけれ。

にごりたる池の心にならはざる
はちすの花のいさぎよきかな

大熊つれ子

朝風いと涼しきまゝ、こゝかしこそゞろありしけるに、やぶれがゝりたる垣をめぐらしたるいぶせき家のかたへに出でき、この家の庭に古ひていと大きやかなる泉ありて、蓮をば處せき迄植ゑ置かれぬ、花のこきうすきさり〳〵なるが、葉におきゐる露のまにまに、玉と亂れ、清き香りはゑもいはれず、いみじうらうたきまゝに、しばし佇みて眺めさる程に、こゝろのちりもあらひさられし心地して、つら〳〵思ふに、實に蓮の愛づへきは、濁りし水より生ひ出でゝ、にごりにそまぬ様なりかし、古人の、花の君子なりとめでし言の葉は、まことにいはれけるにこそ。世に美しき花の歌文にうたはれたるが數多あれど、このたぐひあるべしやは、愛づべしといはんよりは、まことにたふとむべきは此の花になん。

東野さく子

かれて蓮の花の折にはと契りし友と、夜半の暑さに堪へかね、とく起き出て、池の邊に行けば、蓮はの濁にしまぬ心もて、白紅の花打まじり、處せう咲きみち、廣葉卷葉の、波のまに〱、動くにつれ、玉とあざむく白露のこぼるゝなど、かの玉ゆりりかへるといひし古ことども思ひ出でられ、心地涼しく、吹き來る風にたくへて、ねならぬ香の打匂ひくるなど、此世のものとも思はれず、一入清けき辭りぬ、

にごりぬる池にさけども花蓮
　　涼しき風に匂ふきよけさ

など打ぎんじつゝ、家路にきぬ。

江口とみの子

明日は朝とくより、遠きあたりの池の蓮見に物せんと、きのふ友のいひおこせしに、例の朝いして、目ざとき友の、いざ行かんと誘ひきぬれば、ねむりさまして、ありあけの月の光り薄るゝ頃より、いてたちぬ、やがてふく風の、あやしく匂ふに、はやこゝなめりと、うれしく近つけば、花のさまの目出たさに、いつしか目もさめはてぬ。花も葉もおなし匂ひのいと清く、袖にしみぬる、何にたとへんものなし。

井澤たな子

わが住める伯母君の庭に、蓮の生ひしげりて、いと清き池あり、さばかり大きやかなるにはあらねど、そのありさまいとなかしう、水も見えぬまで葉ひろごれり。また前栽には、くき〱のうるはしき花ども、濃く薄く匂へるを、獨り見れるさへたのしきに、晩ふかくおり立ちて、そこはかとなくふみならすほど、朝風のそよと吹きわたりて、葉の上に玉と見ねたる白露も、はら〱とこぼれおつるに、今更にもろき露の命もおもひしらるゝて、いとかなし。またむかし手づから、故郷の庭なる池に植ゑし蓮も、今年はいかならん、こぞの夏は花のさかりをもめでけるを、などいとも慕はしうて、

さきくあれといひてわかれしわぎもこが
　　そのおもかげも見ねわたるかな

とうちいでらるゝも、實にことわりなりや。さても妹がむはいかならんなど、思ひやられてなん。

綿野りき子

暑さのいみしうなるをのがれて、鎌倉に程遠からぬ寺院にうつりけるあした、露けき庭におりたちて、彼方此方などろあるきつるに、そこはかとなく打ち匂ふ朝風の、いみしうたへなるに、そは何處よりぞと、香を便りに進み行けば、御堂の後に、廣らかなる蓮の池あり。紅白打まじりたるが、露いとすが〱しうみち渡りて、朝日なまって咲き出でん有樣、露にぬれたる花かけの美しきに、心ありてうたふ蛙の聲清う鳴き出でたるは、しらべなかしき糸竹の音にもあやまたれて、實に此世にもあらぬ心地そしける。まいて綠すゞしき浮葉の上の、玉なす露の光りも、けに潔き操にもたとうべくさすがに花の君子にて、色に香に取りならべ何れめでたからぬはなきなさひとりつぶやきつゝ眺むる折柄、さと吹きくる朝東風に、露の白玉のはかなくまろび落るも、哀れにいみしく見ねてなん。

蓮葉のつゆにひとしきいのちもて
　　哀れといふもおろかなりけり

右田藤子

人の心を清くなすものは、この蓮の花より外にあらじと思ふ、土の内よりぬけいでゝ、にごりにしまぬ池の蓮は、草花にまさりて、人のいと〳〵めづるものにして、廣葉巻葉まじりて、池の内におひ茂りて、其若葉の上に露おきて、朝風かをる中島より、日影のほのめきいでたるさま、ゑもいひしらず、すが〳〵しうなん。

佐治房子

一日あつさに堪へかね、日頃志たしき某の亭は、樹木おひしげりて、築山泉水などいと廣やかに涼しく、はた遠くもあらねば、はらから打つれ行きておどろかしぬ、折しも池の蓮の花盛りとて、みちひかれて、おはしまよりながむれば、けに何かしのにごりにましぬといひけんも思ひいでられて、池水はさばかりきよらにもみゑねど、あかき白き青葉にまじりて、水の面をかしく、さながら花のむしろをしきたらんごとく、立葉うき葉にやどれる露を、そよふく風のもてあそびて、涼しくこぼるゝさまなど、得もいはれず、げに御法けの花とかいひて、心のけがれもあらふごとく、終の我身のやどりにこそまことに此世のものとはみゑず、身も心もすが〳〵しくなりて、いつしかあつさも去りて、たそがれちかうなりければ、あかぬものから、いざとてかくはしきかをりにおくられてかへりぬ。

鈴木綠子

ふみ月の初めつかた、暑さいやましにまさりてたへがたければ、木かげをそゞろありきせんと、友ごちふたりみたり打つれ、歩をはこびぬ、やがてやう〳〵涼しく、そよ〳〵と吹きくる風に、すが〳〵しき心地しければ、樂しくうち語らひつゝありきける程に、いつしか逍遥の南門にぞ入りたりける。折しも池のはちす、今を盛りと咲きみちたるいとをかし、なほ池ばたにゆけば、水いとにごりて、底をも見わけがたきに、花も葉もにごりにしまぬなど、歌にも詩にもよまれ、人にももてはやさるゝは、げにさることよと思ひ出しては、古の貞節なる人のことさへゆかしく思ひやられて、しばしうち見るほどに、ふと心づけば、はや日は西の山の端近くかたぶきたり、今は一しほ艶に見ゑ渡りて、こよなうめでたく、餘りのことよと、常にもあらすめではやされてなん。

東野けい子

ひろはゝ消ゑぬべき玉に、有明の月のうつろふさまを見んとて、曉の鳥より早く起き出て、とある池のほとりに行けば、日頃あれはてて見るかげもなき濁り江なるも、已が時とて、白き紅き蓮の花打交り、盛せう咲きみちて、廣葉よりこぼるゝ露もいと涼しく、吹くとしもなき朝風に、ゑならぬ香の打匂ひくるに、此頃のひるの暑さもうち忘れ、心の中も清く成り行くこそうれしけれ。

安井うめの子

あまたれの雫さゞこほりて池をなす、その水必ず清くしもあらず、おほかたは濁れるが常なり、これ家居の里に近ければなり、しかるに、その中にしも生ひ立ちて、濁りに染まぬ蓮の氣高さよ、げに世の人の、泥中の蓮花とて、もてはやすもことわりなりかし。いでや、人と生れて、この花におとりてあるべきかと、覺ゑず顔も赤らみぬかし。

田部里子

夏はひな住居こそよけれ、まいて端ちかう池なとしつらひたるは、ひさきはなんめり、やれしまがきに、蜘蛛のみものする我宿も、こ

のごろは、庭のあなたに蓮ばの所せきばかりおひ茂り、濃き薄き、とりどり花の咲き満ちて涼しう吹きくる風に、露の白玉をうつしがふるなど、えも言はれぬ風せいになん。蓮葉の濁りにしまぬとは、げにも言ひけんかしと、眺むるにつけ、あはれ今の世のうつろひやすき人の心の、かくもがなと、せちに思ひなされて。

おのづからはさへ花さへ其みさへ
濁にしまぬいけのはちすば

武政常盤子

ふりつゞく雨に、水さへまして、池の面はにごり、うき世の人の心も、大方はこれに似たるへけれど、ひとり蓮の花のみは、よし水の濁、にあふるゝとも、清らなる心に替りやはあると、或人の云ひし言はをほのかに覚え居れは、我も其うるはしきはな、かくはしき匂ひをもてるはちすを尋ね見はやと思ふ折から、雨晴れ渡り、山のはにたに少しのうき雲もあらねは、いと心地よきまゝ、遠近とすゝろありきをなし、つかれしまゝ、しはしといこひしは、言のはの友人の住家なりけり。引かるゝまゝに奥まりたる一間へ通り、庭の面を見れは、新につくりし池殿のけしき、いとゞ涼しく見え、水は雨後の為にや、にごり居れど、あたり香はしく、今を盛りの蓮の花の風情は、何にたとへんものなく、今更に昔めでにし人のしのはれにけり、葉上の白露は、眞玉とも見え、涼しき風の吹来り、袖と我へも薫る心地せられて、かへるさの家路忘れはて、友のすゝむるまゝに、腰折し歌二つ三つ詠み、日も暮ぬれは名殘ををしみつゝ別れ、漸く庵にかへりて、机に向ひ、かくしるすうちにも、あはれ今日の蓮の如き清き心にならひつゝ、世を送りなは、如何に安からんと思ふまゝなかくなん。

濱田とめ子

ほのぼのと明け行く空の氣色に、吹くとしもなき朝風の、ねならす薫りくるは、何やらんと、庭におり立ち、見めぐる打から、池のいろくすのをとりしにやあらん、あやしの水音聞えければ、中垣よりかいま見けるに、いつしか涼しげに、隣の池の蓮は咲でたり、あはれなつかしと、たゝすみをれは、主出で來て、濁りなき言の葉に、いざ此方へと誘はるゝまゝ、内にいれは、よく涼みせられしとこありけり、それにこし打かけ、物語りつゝ眺め居れは、高うのひたる廣葉の、風にゆうめけは、露はこぼれて、下なる浮葉の玉となるもをかしく、またうす緑の卷葉に、置きたるは、白玉をにきれるか如く、とりどりおもしろし。

弘田ゆき子

東雲の、ほがらほがらと明けゆく空に、山時鳥ふり出でて、おのが皐月と名乗りゆく聲聲も、面白き此の朝け、池のおもてに音たてゝ、開きそめたる蓮花の、二つ三つ、あはれ泥の中より生ふれども、葉におく露は、さながら玉と見えわたるに、つらつら思へば、大かた此の頃の、人の心も、ともすれば、濁るが多き世の中に、汝れこそは、獨りぬけ出でゝ、塵のうき世をよそにへだてたる、清き蜜を道の奥なる安積山、影さへ見ゆる山の井の、淺くは誰も思はぬなるべし。

池水の波のうねうねゆらきあひて
玉とあざむくはちす葉の露

岡内寛子

短夜の夢さめて起きうきものから、やをら妻戸ひらけば、うすく殘れる有明の月、かなたの柳の糸のひまより、いとおぼつかなう見ゆるも、仲々に哀れなるにふと催ふされて、廣からぬ庭の蓮池にものしつ、朝風いと心地よく吹き渡りて、蓮の葉のうら葉うちかへす毎に、まなかにたまれる露のゆらぐもあやふく、遂にはいさぎよき音してこぼるゝ等、先つをかし、高くひくゝ、あるは水にうかへる、深の靑々としたる中にまじりて、まき葉にそひて高く抽きいて、咲ける花のすがたこそ、こよなう美はしけれ。花ひらのきは少し赤うなれるに、白露のみこぼれぬばかりなる、すゞろに心まで淸げに覺えられてなん。まいて折〳〵淸き香の吹きくるもゆかし、咲きみたれたる花辨の散り、池水に小波をうたせて、さながら小さき花の、舟のうかひたる風の、まに〳〵さまよひて、かなたこなたの浮葉にあたるさま等、筆のおよばゞ畫にかきてましをなど、ひとりごたるゝも、げにゆかしきや、さるにいつそや放ち入れし鯉の、あちこちよりつきまはして、はては舟のくつがへりたる、いと〳〵をかしうこそたばねしか。

梨本信子

花よりさきにと思ふ心のならひとなりて、池の蓮の咲きそめしより曉おきの袂すゞしく、今朝もとく妻戸おしあくるに、さと吹き入るゝ風の、身にしむばかり香りたるは、又いくつかの花やそへたると詠むれば、水の面も見えぬ迄、翠の扇をひろげたらん如き葉末に、玉とも見ゆる白露の、淸さ、涼しきに、濁りにしまで咲き出でたる花の美しさ、女の操もかくこそあれと、數多き水草の中に、似るもののなうこそ見ゆれ。あはれ此花よ、昔はひとの國に、珠の外にもてはやされて、佛の御國には、之をのみ弄ぶも、花實共に具備せるによるとか、幼かりし時、片耳にせし御坊のざれ言も、實にと思ひ出さるゝ姿かなと見るに、あなたの木陰をもれて、「水泛二紅衣一白露秋」と吟じませる兄上の聲、やゝ近づくも、折からいとをかし。

佐藤喜代子

此二三日は、五月雨、いとつれ〳〵に、ふりつゞき、空もむもしめりがちに、一人學の屋の窓の中に、さみしく、のみ、古人の書などひもときつゝ、おもしろからぬ日を送り居りしが、昨日は、夕つ方より、くもはれ、四方の空あひ、何となく、おもしろく、あすこそは、殘りなくはらべしなど、ながめて、いと〳〵、心ゆかしく、おほねたり。けさにも成つれば、思ふどち手をつられ、彼の忍はすの池なる蓮の花、口きりそめぬ、先きに、かの地に至りて、朝つゆに、口きらんを、今やおそしと、まちつゝみはやさ、おもひおこし、其夕つ方より、もろ〳〵の心あひし友に文をよせしに、あなうれし、皆々おなし心志とのよし、明日は、みちにて、ひとつまとゐせんと、いひおこせたり、殊にうれしく、はやくあくるあしたを待ち〳〵て、其夜はふしどに入りしが、ほどなく、目さめ、時計を見れば、最早四時にも、間近に成つれば、いそぎ、なとなし、はしため一人つれたちて、打合せ置し道の邊に行きしに、もはや二三の友人は、そこの邊にまち居られつれば、いと嬉敷、いざさて、人々と、あゆみ行きしに、池の面を一目見しに、いとゆかしくも、をかしく、古人の「蓮す葉のにごりにそまぬ心もて何かはつゆを玉とあざむく」と、よまれし事とも、おもひ出しまことに、かゝるにごり

江の中に生ひ立ちし、はちす葉の、其にごりにそまで、かくもうつくしく、香ひやかなる花のさき出し事、あはれ、人も此花にはぢぬやうあらまほしさおもひてかくはものしぬ。

名取正代子

土さへさくてふ水無月の、一夜暑さ苦しくて、いもねられざりければ、曉の程まちつけて、いそぎ朝戶おしあけぬる折しも、池のさゞ波に、ぬれても吹くかさばかり、凉しき風さ共に、ねもいはれぬ匂ひの窓の内にさし入りて、音も淸らに咲き出でたるは、池の蓮の花にぞありける。見るから、暑さも打わすられつゝ、庭におりたちてながむるに、ひろごりたる蓮の葉ごさに、露の白玉かざしつゝ、やさしげに、風のまに〳〵打ゆらぐさま、いさなかしければ、「吹きさそふ風のまに〳〵露ちりて、匂ひこぼるゝ花はちすかな」などゝ口ずさみつゝ、倚つく〳〵さ見もてゆくに、其莖のますぐにて、蔓もなく、枝もなく、其香さへ淸きは、いかでにるものなしや、將かゝる泥深き池の中に生ひながら、しかすかに濁りにしまぬけだかさよ、されば、昔の人の、「花淸し人もはちすのそだてがら」などいひて、花の君子さたゝへつるも、實にことわりにこそ。

降田槙子

おのが家の見渡しに、大なる池ありて、蓮あまた植ゑられたるが、葉の生ひひろごりて、吹き渡る風にゆらぐも、いさ凉しけなり。昨日今日、花のあまた咲き出でたる、いさ美しく、其色の淸きこさ、譬にたさへんにも、月にくらべんにも、なほあかぬ心地ぞする。まいて、其かをりの高きこさ、云はん方なく、げにめでたしさもめでたし。さてかゝる花の生ひ出づる池の中は、いさも〳〵いぶせき泥水にて、見るさへもいまはしきに、そが中よりぬけ出でゝ、つゆ濁りに染まぬのみかは、香さへいさけ高きこそ、たさしへもなくたふさけれ。されば、古より、歌に文に、はたから歌に、もてはやされ、泥中の君子などたゝへらるゝも、げにうべなりや。人の心も、かくてこそ、世に高くかほるならめなど、思ひつゞくるなりしも、いよす吹き入るゝ風の、得ならぬ香を送り來りたる、いさ心ありげなり。

植木鋼子

池水の濁りにしまず生ひ出て、眞白紅咲き初めし蓮の花のゆかしきなり、葉に結ぶ露の白玉、淸げなる、みるからに心すが〳〵しう成り行く折節、浮葉を渡る朝風に、露も匂ひもこぼるゝさま、いさゞなつかしう覺ねてなん。

岸田はつ子

例ものする池の蓮、この頃盛なりさ人のいふに、朝開くさき音のすさいふなるを、いまたききしらねば、聞かまほしくて、夜半すぐる頃より物しつゝ、短夜のかぎりなれは、道すらの家々、ふかく戶さしこめて　人のけはひもなきに、車の音のみ高く空にひびきたるも、何さなうなかしく、やがてゆきつきぬれは、月は早や光なうしなへるに、東雲やう〳〵しらみゆく程にて、池の面近きあたりよりぞ見ねゆく、咲けるさかさる、さま〴〵にて、白妙に淸きかあれは、紅ふかく匂ふもありて、さり〳〵になかしきが中に、いま咲きいづるにや、二つ三つ音のきこゆる、殊になかし。生ひひろごれる靑葉の上における露は、げに白玉の如く、そよふく風にみだれて、ねならぬ香をさそひくるなさ、いふはかりなきけしきなれば、口にまかせて、

池水のにごりにしまぬはちすはの
　　きよき心をこころさしもがな

なせ、つつじりつつ、立ちかへりぬ。

宇多田やう子

降りしきる一村雨に、なほ勢ひそふる池の蓮、浮葉に露の玉おひて、花は紅白交〴〵匂ひゆかしく、いさうるはしく咲き出てたるさま、心も清くすみわたりて、ねもいひ知らすなん、されど、その池のにごりの中に生ひ立ちて、がくはかりたくひ稀なる、きよけくにみやびやかなるを見ては、また人さしては、愚はさらめやは、たさへいかはがり生れいやしさて、たこなひけたゞく、身一つのけがれたに染ますは、浮葉の玉、花の鏡さなりて、うやまはれもてはやさるゝを、げに泥中の君子さは、うべなりけり。

河野つれ子

蓮花々々。池蓮花。東雲白むさ諸共に、咲く音たてゝ、香を放ち、葉毎におく露の、玉、猶涼しき朝風に、揺らりゆらりさ葉末まで、まろびて砕け散りもしぬ。或は再びさゝまるを、いさあやふけに、笑ましげに、ながむる風情またゆかし、濁りに育ち、濁らぬは、人の羨むさころなり。あなうるはしや池の蓮、茂れる葉には、玉をおき、ゆたかに咲ける花の色、芳しき香は池の上に、充ちにみつれど、其下は、濁れる泥の俗世界、名利の塵に埋もれて、水の面僅かに美を競ふ、其美に一層美を飾る、蓮花や、蓮花、池蓮花、濁りに育ちて、潔よく、清き香を他に分つ、我も似まほし池蓮。

矢島はい子

こしきのうちに、あるかさ凪はるゝ、このころの暑に、池の蓮も、いつしか、ねならぬ、香をさめて、さころせきまて、さきいてたるは、世にもめてたくぞ、なかめられける。さてあしたには、うらゝかなる、日かけに、花の色も、清らに見ゆ、ひろき花逕に、むすべるつゆに、月をやさせる夜半などは、ひるにも、まさりて、一しほゆかし。わけて、泥の中より、ぬけいて、濁りにしまず、さきいでぬる、其清きすがたは、道のをしへの法さ思はれ、いさゝ尊くぞながめらるゝ。されば、めかれせぬ、庭の面さへ、氣高う見ゆ、あさな夕なにながむる身も、ちりをはなれし心地ぞする。

◎女鑑月並彙題

八月五日
- 歌……綠陰散歩
- 文……海邊に遊ぶ

七月廿五日〆切

八月廿日
- 歌……電信
- 文……團扇

八月十日〆切

九月五日
- 歌……野邊萩
- 文……窓の海を見て

八月廿五日〆切

九月廿日
- 歌……松間月
- 文……辭書の撰擇を乞ふ

九月十日〆切

歌文彙題は必ず〆切期日迄に本社に到着する樣送らるべし。期日に遲れたるは總て沒書とす。

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ者は別に證券郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢	
十二冊前金（半年分）	壹圓	
全國無郵送料		

明治三十年七月二十日印刷

同年七月二十一日發行

編輯兼發行人 東京京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衛

印刷人 東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地 並木亘雄

發行所（電話番號本局八八） 東京京橋區築地二丁目二十一番地 國光社

金製指環

●瀧和亭先生考案並畫

●野口小蘋先生考案並畫



一號ヨリ四號迄片切彫甲價二十八圓乙價二十三圓●同平象嵌入甲價三十五圓乙價二十七圓五號ヨリ六號迄薄肉形甲價四十二圓乙價三十三圓七號ヨリ八號迄甲價四十七圓乙價三十八圓●市外遞送料金貳拾錢

◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎

指輪は其人の正札なりとは千載不動の名言男女に限らず其指にはめたる指環を見れぞ。其人の性質品格れのづから現はるゝ事。諸君御承知の通なり。なまじひ其品位を劣す様なる指輪は。寧ろ指さゞるが愈ぞかし。强に金の量が重くて、寶石か輝きて、彫刻が奇麗なる計で、品格を上るものに非す。品格は金にて買ると思ふは謬なり。假令ろの價は高からずとも其意匠や彫刻が優美なれぞ。何と無く氣高く見ゆて。其人までが奥ゆかしく成ること。是ぞ即ち美術の德なる。本堂深く此に意を注ぎ。金製指輪の製作に意匠を凝し彫刻に精妙を竭し、內外の時好に魁して。殊に高尙を旨と致すなれぞ。優美なるは。勿論瀟洒風流の意氣自然に溢れて。是を指せぞ其品格を進め。其人の性情さこそと見ゆるきつと保證いたすなり。願くは一覽して、本堂が諸君を欺かざる事を知し召せ。謹で白す

妙技一等賞牌



東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八番地
時計及寶玉類貴金屬美術品商（電話番號本局三百三十三）天賞堂

東京市神田區小川町十九番地（電話架設中）
天賞堂小川町出張所

大坂市南區新齋橋北詰北ニ入ル（電話番號七百三十三）
天賞堂大坂出張所

名古屋市本町通玉屋町二丁目十七番戸
天賞堂名古屋出張所

廣島市大手町三丁目六十五番地
天賞堂廣島出張所

熊本市唐人町通上鍛治屋町十番地
天賞堂熊本出張所

長崎市萬歲町卜野屋方
天賞堂長崎臨時出張所

北海道小樽色內町越中屋方
天賞堂小樽臨時出張所

（明治二十四年八月四日內務省許可）
（明治二十五年三月十二日遞信省認可）

（印刷所　東京國光社印刷所）